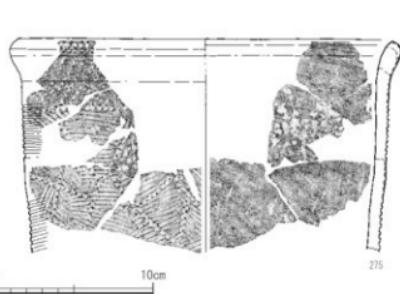
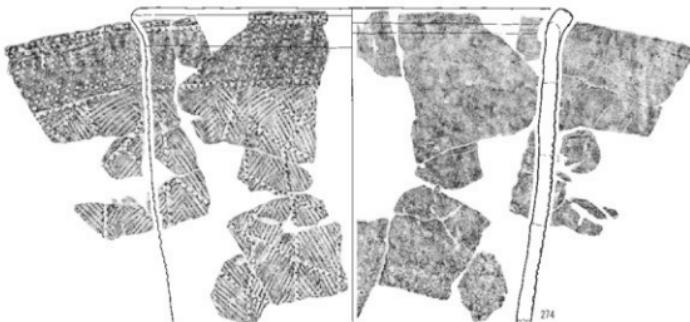
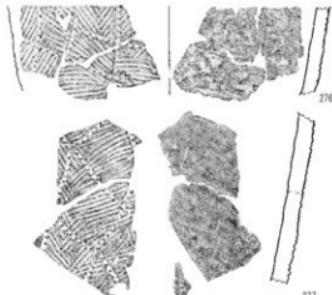


273



275



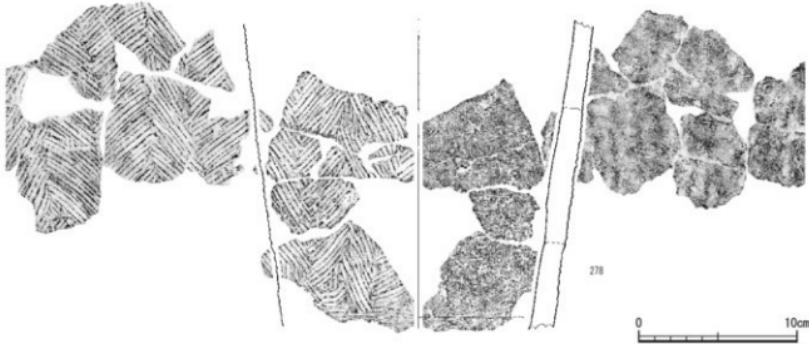
237

第238図 繪文早期土器実測図(40) (3.31群土器/桐木調査区出土)

第63表 紹文早期土器觀察表 (21) (3群土器-11)

品種名	品種番号	分類名	取扱い上(リツイフ)形態	社内	販賣(販)	調査(調)	備考
238_073	3.31		○CK4560(5-6頭) ○CK4561(5-6頭) ○CK4562(5-6頭) ○CK4563(5-6頭下)	播、育苗	ハラナデ	-	-
238_074	3.31		○CK4564(5-7頭上) ○CK4565(5-7頭) ○CK4566(5-7頭下) ○CK4567(5-6頭) ○CK4568(5-6頭) ○CK4569(5-6頭) ○CK4570(5-6頭) ○CK4571(5-6頭) ○CK4572(5-6頭下)	播、栽培	ハラナデ、ハラツキ等ナデ	-	-
238_075	3.31		○CK4573(5-7頭) ○CK4574(5-7頭上) ○CK4575(5-7頭下) ○CK4576(5-6頭) ○CK4577(5-6頭)	播、育苗、栽培 育苗	ハラナデ等ナデ	-	出土実測
238_076	3.31		○CK4578(5-7頭) ○CK4579(5-6頭上) ○CK4580(5-6頭下) ○CK4581(5-6頭)	播、育苗、栽培	ハラナデ	-	-
238_077	3.31		○CK4582(5-7頭) ○CK4583(5-6頭上) ○CK4584(5-6頭下) ○CK4585(5-6頭下)	播、育苗、栽培	ハラナデ等ナデ	-	-

第64表 繩文早期土器觀察表 (22) (3群土器-12)

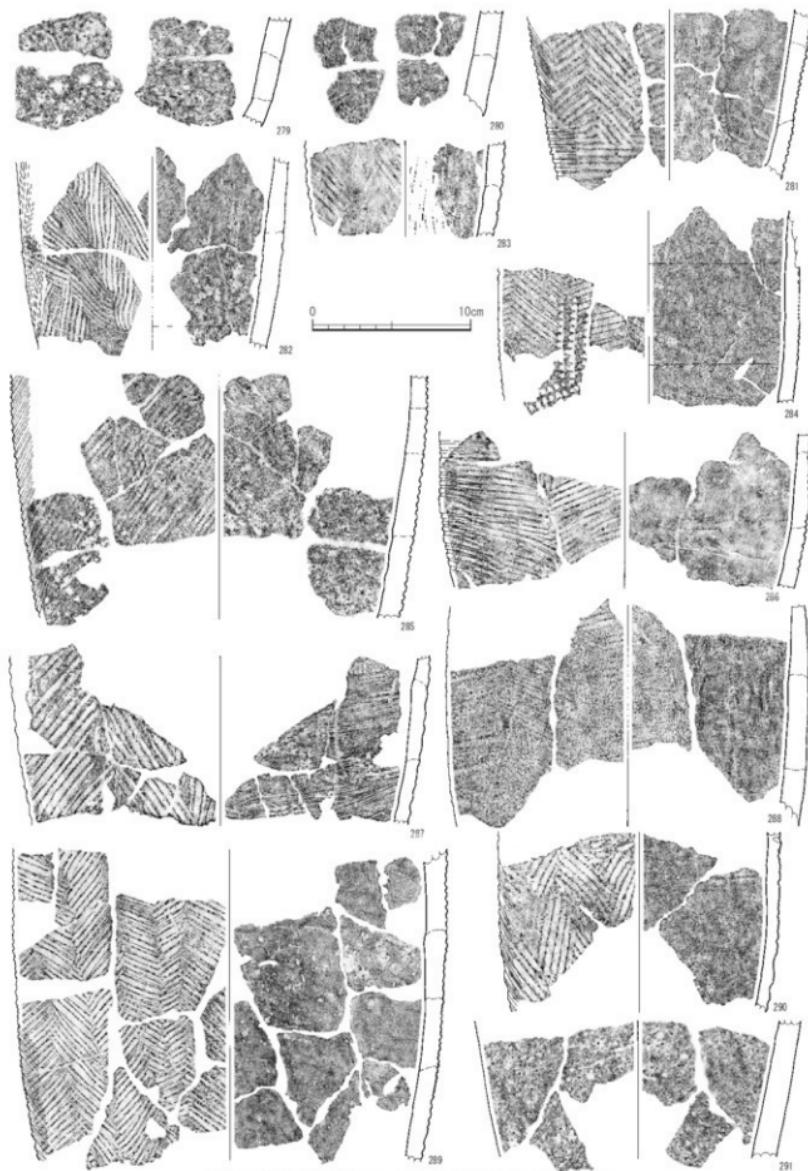


第239図 繩文早期土器実測図(41) (3.31群土器/桐木調査区出土)

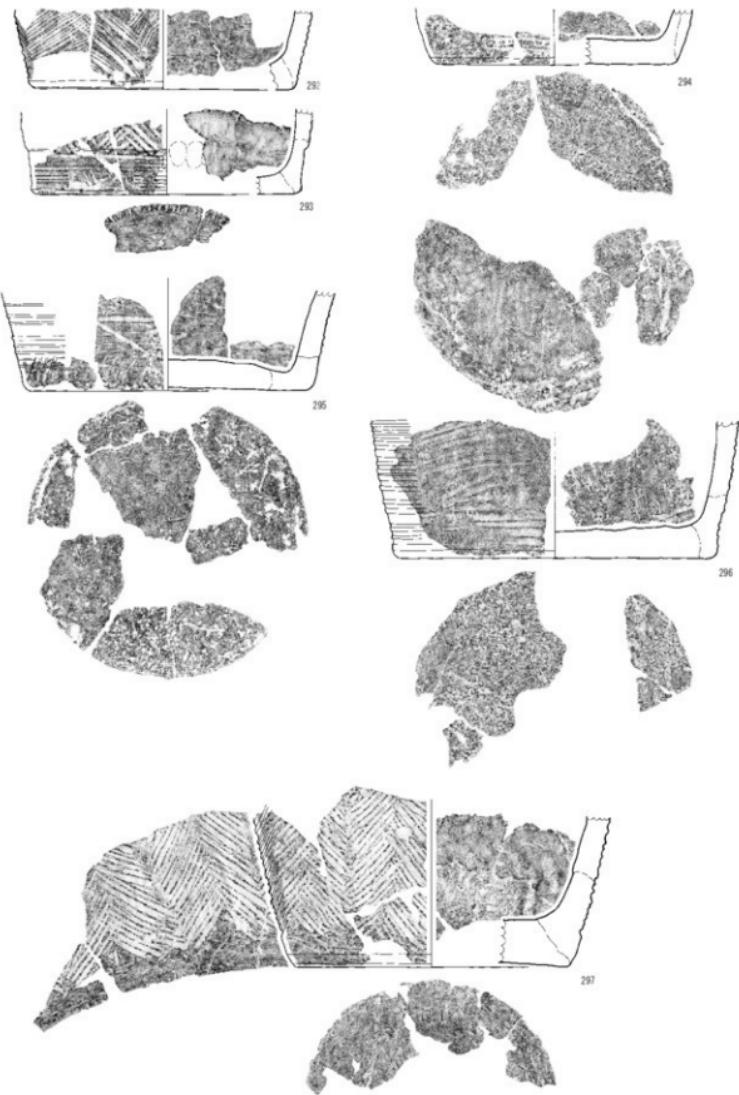
第65表 繩文早期土器觀察表 (23) (3群土器-13)

編成 番号	固有 名	分類 記号	船上No.(フィット番号)	船主	設置(内)	設置(外)	備考
245	285	3.15	O4296(3-9-1上) O4297(3-9-1中) O4298(3-9-1下) O4299(3-9-1左) O4300(3-9-1右)	株. 伊藤	横ハケーナナ	-	-
246	286	3.15	O4295(3-9-1上) O4296(3-9-1中) O4297(3-9-1下)	株. 伊藤	横ハケーナナ	-	-
247	287	3.15	O1423(3-11-1上) O1424(3-11-1中) O1425(3-11-1下) O3636(3-11-1左) O3637(3-11-1右) O3638(3-11-1中) O3718(3-11-1左) O3719(3-11-1右) O3720(3-11-1中)	株. 伊藤	工兵科ハケーナナ	-	-
248	288	3.15	O3801(3-11-1上) O3802(3-11-1中) O3803(3-11-1下)	株. 伊藤	横. 機. 伊藤	横. 機. 伊藤	-
249	289	3.15	O4296(3-9-1上) O4298(3-9-1中) O4299(3-9-1下) O4300(3-9-1左) O4301(3-9-1右) O4302(3-9-1中) O4434(3-9-1上) O4435(3-9-1中) O4436(3-9-1下) O4670(3-9-1左) O4671(3-9-1右) O4672(3-9-1中) O4673(3-9-1下)	株. 伊藤	カズリ-丁寧なナナ	-	-
250	290	3.15	O4291(3-9-1上) O4292(3-9-1中) O4293(3-9-1下)	株. 伊藤	横. 機. 伊藤	横. 機. 伊藤	-
251	291	3.15	O3923(3-9-1上) O3924(3-9-1中) O3925(3-9-1下)	株. 伊藤	ナデ	-	-
252	292	3.15	O4785(3-12-1上) O4786(3-12-1中) O4787(3-12-1下)	株. 伊藤	横ハケーナナ. 指頭頭	丁寧なナナ	-
253	293	3.15	O3936(3-12-1上) O3937(3-12-1中) O3938(3-12-1下)	株. 伊藤	ナデ	直角ナナ	-
254	294	3.15	O4788(3-12-1上) O4789(3-12-1中) O4790(3-12-1下)	株. 伊藤	横ハケーナナ	横ハケーナナ	-
255	295	3.15	O4686(3-12-1上) O5678(3-4-1上) O5679(3-4-1中) O5680(3-4-1下)	株. 伊藤. 植	ハケーナナ. 指頭頭	ハケーナナ	-
256	296	3.15	O5676(3-4-1上) O5677(3-4-1中) O5678(3-4-1下)	株. 伊藤. 植	カズリ-短いナナ	-	-
257	297	3.15	O4248(3-9-1上) O4249(3-9-1中) O4250(3-9-1下)	机. 伊藤. 植	ハケーナナ	ナデ. ハケーナナ	-
258	298	3.15	O5683(3-11-1上) O5684(3-11-1中) O5685(3-11-1下)	株. 伊藤	ハケーナナ	施設部に貼付	-
259	299	3.15	O5686(3-11-1上) O5687(3-11-1中) O5688(3-11-1下)	株. 伊藤	ハケーナナ	-	-
260	300	3.15	O4249(3-9-1上) O4250(3-9-1中) O4251(3-9-1下)	株. 伊藤	ハケーナナ	丁寧なナナ	-
261	301	3.15	O5691(3-7-1上) O5692(3-7-1中) O5693(3-7-1下)	株. 伊藤	ハケーナナ. ユビナナ	-	-
262	302	3.15	O5718(3-11-1上) O4219(3-9-1上) O4220(3-9-1中) O4221(3-9-1下)	株. 伊藤	ナデ	-	-

第66表 繪文早期土器觀察表 (24) (3群土器-14)

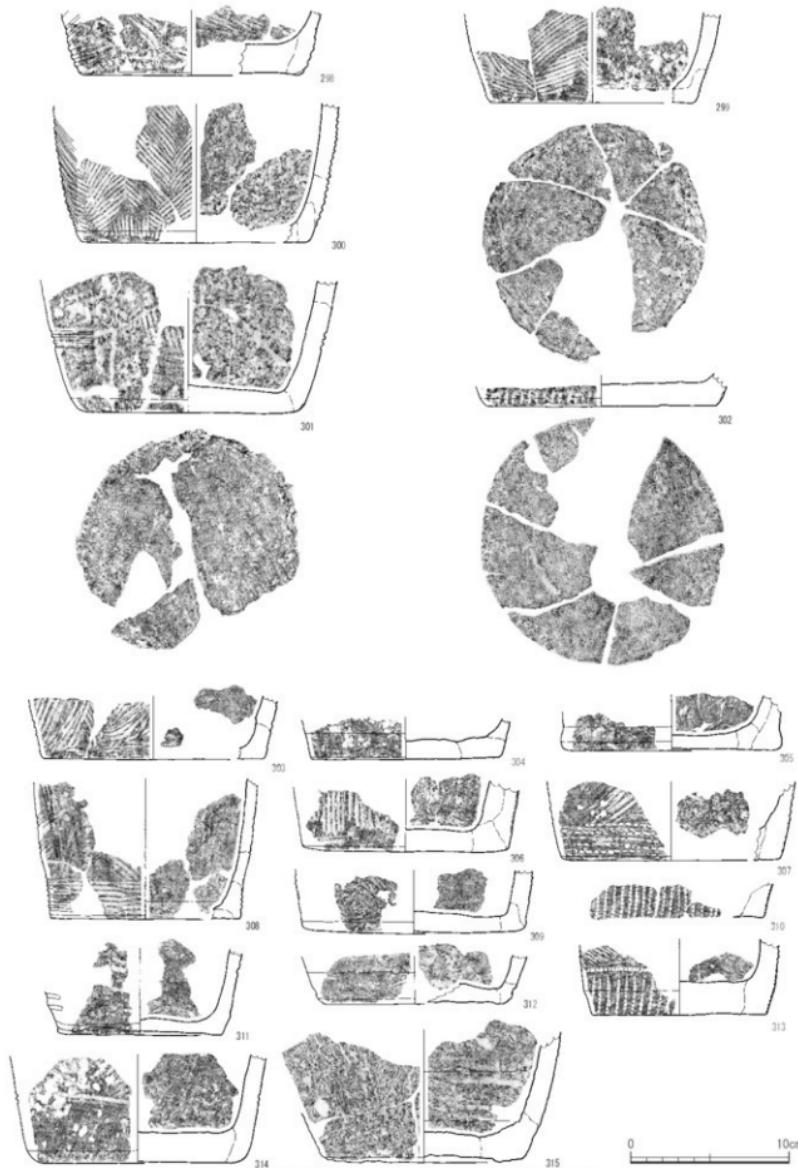


第240図 純文早期土器実測図(42) (3.15群土器/桐木調査区出土)

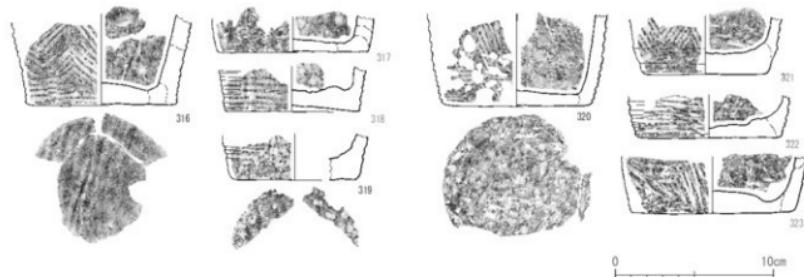


第241図 縄文早期土器実測図 (43) (3.151群土器/桟木調査区出土)

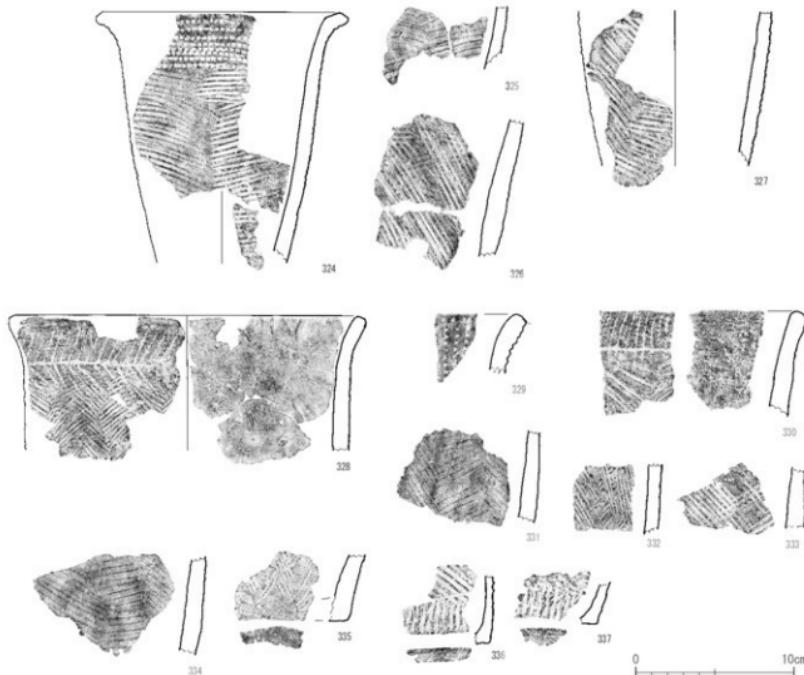
0 10cm



第242図 純文早期土器実測図(44) (3.151群土器/桐木調査区出土)



第243図 縄文早期土器実測図 (45) (3. 151群土器/桐木調査区出土)



第244図 縄文早期土器実測図 (46) (3. 113群土器/3. 122群土器/3. 151群土器/耳取調査区出土)

第67表 縄文早期土器観察表 (25) (3群土器-15)

編号	部	分類	記号	既上記(アリ)ノトキ	胎土	調査(内)	調査(外)	備考
244	331	3.15	▲180(1-9/薄)	縦、横有	ハケーナデ	-	-	
244	332	3.15	▲180(2-20/薄)	角、縦、横有	ハケーナデ	-	-	逆毛材 色黒石
244	333	3.15	▲180(1-10/薄)	角、有	ハケーナデ	-	-	砂粒多量
244	334	3.15	▲180(1-18/薄)	角、縦、横有	ハケーナデ	-	-	

第68表 縄文早期土器観察表 (26) (3群土器-16)

編号	部	分類	記号	既上記(アリ)ノトキ	胎土	調査(内)	調査(外)	備考
244	335	3.15	▲180(1-20/薄)	角、縦、横有	-	-	-	逆毛材 色黒石
244	336	3.15	▲180(1-19/薄)	角、縦、横有	横ケツリーナデ	直面 ハゲーナ	-	
244	337	3.15	▲180(1-19/薄)	角、縦、横有	横ケツリーナデ	直面 ハゲーナ	-	

### 3 縄文時代早期中葉の土器群

桐木耳取遺跡で出土した縄文時代早期中葉の時期に属する土器は、概要の項で示したように5群に大別できた。

さて出土分布図から縄文時代早期中葉の土器群は、主に耳取調査区北側地区および耳取調査区南側地区に集中していることが指摘できる。そして桐木調査区西側地区では部分的にまとまって出土し、桐木調査区南側地区や桐木調査区北側地区では点々と散在して出土している(第182図参照)状況が指摘できる。

これらの土器群はさらに、土器型式別に細別が可能であるため、順次報告を行うことにする。

#### 第4群土器(第251図~第261図338~408)

第4群土器に属する土器は、その施文的特徴および器形的特徴から、さらに4類に分類できた。

本群に属する土器は層位的にはⅦ層とを中心にⅧ層でも出土しているが、上層のVI層やV層からも出土しており、地層の横転や後世の擾乱が激しかったことが認められる。

第4群土器第1類土器(分類記号4.1、第251図~第254図338~351)

##### 第4群土器第1類土器に属する土器を14点資料化した。

器形的特徴としては2種類に分けられるといえる。

第1タイプ土器は、口縁形態は平口縁を呈し、口縁部は若干内寄して、口唇部は水平な平坦面あるいは内傾する平坦面を作り出す。そして、胴部は直線的にすぼまり、底部は平底を呈するのが特徴である(第251図~第252図338~346)。

第2タイプ土器は、口縁形態は平口縁を呈し、口縁上端部のみが若干内寄する以外は、口縁部はほぼ直行する。特に口縁上端部外面はほぼ45°の角度で丸く削られている。見かけ上、口縁部の内寄形態を強調するのが特徴である(第254図349~351)。

施文的特徴としては、波状を呈する貝殻刺突文が本類土器細別の指標である。口縁部文様帯には横位方向に貝殻刺突文を数条巡らし、胴部文様帯全面には羽状あるいは螺旋状の貝殻刺突文を縦位方向あるいは斜位方向に施し、さらに胴部下端部には羽状文を1列横位方向に巡らす特徴がある。

調整方法としては、内器面では、木製工具によるハケ調整の後に丁寧なナデ調整を最終調整としている土器が多数を占めた。また、最終調整として丁寧なナデ調整を行なう土器も中には見受けられた。しかし、これらの調整方法の違いと相関関係を高く示す他の属性は無かった。

本類土器の胎土中鉱物としては、主に角閃石を含む土器と、主に黒雲母を含む土器とがあるのは、第4群土器第1類土器と共通している。また、細かい粒度の鉱物で構成される土器が多く観られたことは、第4群土器第1類土器とは様相を異にしている。

さて、出土分布図から本類に属する土器は主に、耳取調査区北側地区的うち、特に耳取調査区F~K~2~6区周辺と、桐木調査区北側地区的うち、特に桐木調査区D~E-11~16区周辺とに集中していることが指摘できる(第246図・第249・250図参照)。この分布域は、桐木調査区北側地区的なかでも第4群土器第1類土器の分布域とは異なる状況にある。また、第4群土器第3類土器の分布域とは、耳取調査区北側地区では重なるのに対して、桐木調査区北側地区では異なることが指摘できる。

ここで注目できるのは、第1タイプ土器に分類した土器は耳取調査区北側地区から出土しているのにに対して、第2タイプ土器に分類した土器は桐木調査区北側地区から出土しており、第4群土器第2類土器のなかでも分布域を異にすることである。この状況は、器形的には類似する第4群土器第1類

照)。この分布域は、次の第4群土器第2類土器や第3類土器そして第4類土器の分布域とは明らかに異なっており(第246・247図・第249・250図参照)、注目できる。

第4群土器第2類土器(分類記号4.2、第255・256図352~376)

第4群土器第2類土器に属する土器を25点資料化した。

器形的特徴としては第1類土器と同様に2種類に分けられることが特徴である。

第1タイプ土器は、口縁形態が平口縁を呈し、口縁部が若干内寄し、口唇部が水平あるいは内傾する平坦面を作り出す。また、胴部は直線的にすぼまり、底部は平底もしくは若干の上げ底となるのが特徴である(第256図359~376)。器形的には第4群土器第1類土器第1タイプ土器と共通する。

第2タイプ土器は、口縁形態は平口縁を呈し、口縁上端部が若干内寄し、口縁部はほぼ直行する。特に口縁上端部外面は、ほぼ45°の角度で丸く削られ、見かけ上、口縁部の内寄形態を強調するのが特徴である(第255図352~358)。器形的には第4群土器第1類土器第2タイプ土器と共通する。

施文的特徴としては、「コ」字状を呈する貝殻押引文が本類土器細別の指標である。口縁部文様帯には横位方向に貝殻押引文を数条から十数条施す土器と、羽状に貝殻押引文を横位方向に巡らす土器とが挙げられる。また、胴部文様帯は胴部下端部にかけて全面にわたり、横位方向に貝殻押引文を施す土器と、縦位方向に羽状もしくは螺旋状の貝殻押引文を施す土器とに分けられることが指摘できる。

調整方法としては、内器面では、木製工具によるハケ調整の後に丁寧なナデ調整を最終調整としている土器が多数を占めた。また、第4群土器第1類土器では主体であった最終調整としてナデ調整に止める土器や、ミガキに近い丁寧なナデ調整を行なう土器も少量見受けられることが挙げられる。

本類土器の胎土中鉱物としては、主に角閃石を含む土器と、主に黒雲母を含む土器とがあるのは、第4群土器第1類土器と共通している。また、細かい粒度の鉱物で構成される土器が多く観られたことは、第4群土器第1類土器とは様相を異にしている。

さて、出土分布図から本類に属する土器は主に、耳取調査区北側地区的うち、特に耳取調査区F~K~2~6区周辺と、桐木調査区北側地区的うち、特に桐木調査区D~E-11~16区周辺とに集中していることが指摘できる(第246図・第249・250図参照)。この分布域は、桐木調査区北側地区的なかでも第4群土器第1類土器の分布域とは異なる状況にある。また、第4群土器第3類土器の分布域とは、耳取調査区北側地区では重なるのに対して、桐木調査区北側地区では異なることが指摘できる。

ここで注目できるのは、第1タイプ土器に分類した土器は耳取調査区北側地区から出土しているのにに対して、第2タイプ土器に分類した土器は桐木調査区北側地区から出土しており、第4群土器第2類土器のなかでも分布域を異にすることである。この状況は、器形的には類似する第4群土器第1類

土器とは異なる状況であり、解釈には慎重を要する。

第4群土器第3類土器(分類記号4.3、第257図～第259図377～404)

第4群土器第3類土器に属する土器を28点資料化した。

器形的特徴としては口縁形態は平口縁を呈し、口縁部は若干内弯し、口唇部は内傾する平坦面を作出することが挙げられる。次に、胴部形態では直線的にすぼまる土器が主体を占めるが、弯曲しながらすぼまる土器(第259図404)もあり、2種に分けることが可能である。さらに資料化できた底部形態は第257図389の1点ではあるが、若干の上げ底を呈することが指摘できる。

施文的特徴としては、文様構成で4タイプに分類できる。

第1タイプ土器は、口縁部文様帯から胴部文様帯にかけて範状工具による羽状文を横位方向に連続して施す土器(第257図～第259図377、379、381、382、384、396、397)である。

第2タイプ土器は、口縁部文様帯には貝殻刺突文を横位方向に数条施し、その直下以下には範状工具による羽状文を横位方向(第257図～第259図378、380、383、386)あるいは縦位方向(第257図385)に施す土器である。

第3タイプ土器は、胴部文様帯に貝殻刺突文を横位方向に3～4条巡らした部分と、範状工具による羽状文を横位方向に数条施した部分とを交互に施す土器(第257図～第259図388、389、393、395、398～404)である。

第4タイプ土器は、胴部文様帯に範状工具による連続した刺突文で縦位方向に沈線文と羽状文とを施文する部分を、交互に施しながら胴部全面に横位方向に施文する土器(第258・259図387、395)である。

本群においては、口縁部から底部まで接合した事例が少なく、口縁部文様帯と胴部文様帯との組合せは不明である。

調整方法としては、内器面では、最終調整として丁寧なナデ調整を行う土器やミガキに近い丁寧なナデ調整を行う土器が主体を占めた。この状況は第4群土器第2類土器に比べ、更にナデ調整が丁寧であることが指摘できる。また、第4群土器第1類土器で主体であった直前調整として木製工具によるハケ調整の後に、最終調整としてナデ調整を行う土器も少量みられるることは、第4群土器第2類土器と同様である。

しかし、これらの調整方法の違いと高い相関関係を示す他の属性は無かった。

本類土器の胎土中鉱物としては、主に黒雲母や輝石などからなる土器が多数観られた。特に黒雲母を多く含む土器であり、混和材として含ませた可能性の高いことが特徴である。

また、粗い粒度の鉱物が含まれる土器も細かい粒度の鉱物で構成される土器も共に多かったが、第4群土器第1類土器や第2類土器と比べて、その含まれる割合は共に多い状況が指摘できる。

さて、出土分布図から本類に属する土器は主に、耳取調査区北側地区のうち、特に耳取調査区F～H-3～5区周辺と、桐木調査区北側地区のうち、特に桐木調査区A-11区周辺と、桐木調査区西側地区のうち、特に桐木調査区E～

H-21～26区周辺とに集中していることを指摘できる(第247図・第249・250図参照)。この分布域は、耳取調査区では第4群土器第2類土器の分布域とは重なる。しかし、桐木調査区では第4群土器第1類土器や第2類土器の分布域とは異なることが指摘でき、注目できる。

第4群土器第4類土器(分類記号4.4、第260・261図405～408)

第4群土器第4類土器に属する土器を4点資料化した。

本類土器は、施文的特徴では本群に属する土器ではあるが、器形的特徴などの諸属性ではどの類にも帰属し得なかつた土器である。今後注意を要する土器として本類に細別した。

耳取調査区J-8区で出土した第260図405、406は、同一個体の土器である。

器形的特徴としては、口縁部から胴部上半にかけて強く外反し、胴部はほぼ直行する器形を呈する特徴を有している。

施文的特徴としては、口縁部文様帯から胴部文様帯にかけて、範状工具による羽状文を縦位方向に数段ずつ施した後に横位方向に巡らす部分と、貝殻刺突文を横位方向に数条施す部分とを交互に施し、第4群土器第3類土器と同様の文様を構成することである。

調整方法としては、内器面では、直前調整として木製工具によるハケ調整の後に最終調整としてナデ調整を行う土器である。この調整方法は、第4群土器第1類土器で主体であった方法である。

本類土器の胎土中鉱物としては、主に角閃石と輝石で構成され、粗い粒度の鉱物が含まれる土器であった。

耳取調査区H～I-3～7区周辺で出土した第261図407、408は鉱形土器である。

器形的特徴としては、口縁部は短く外に開き、胴部は外面は膨らみ基本的には直立する形態であることが指摘できる。

施文的特徴としては、口縁部文様帯から胴部上半にかけては貝殻刺突文による羽状文を横位方向に巡らし、胴部上半から胴部下半にかけては貝殻刺突文と貝殻条痕文とで文様を構成していることが挙げられる。文様構成からは第4群土器第2類土器に類似する土器である。

調整方法としては、内器面では、最終調整として丁寧なナデ調整を行う土器である。この調整方法は、第4群土器第3類土器で主体であった方法である。

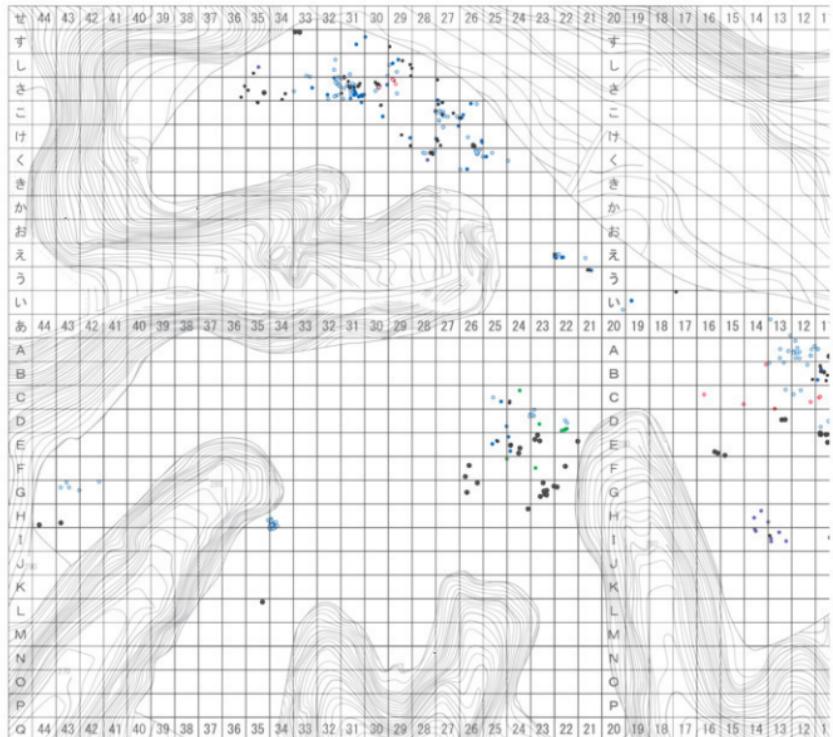
本類土器の胎土中鉱物としては、主に黒雲母と輝石、雲母で構成され、細かい粒度の鉱物を含む土器であった。

これらの土器群は、他の土器と比べて、それぞれ器形的特徴や調整方法と施文的特徴との間に高い相関関係は認められない特異な土器であり、今後注意を要する。

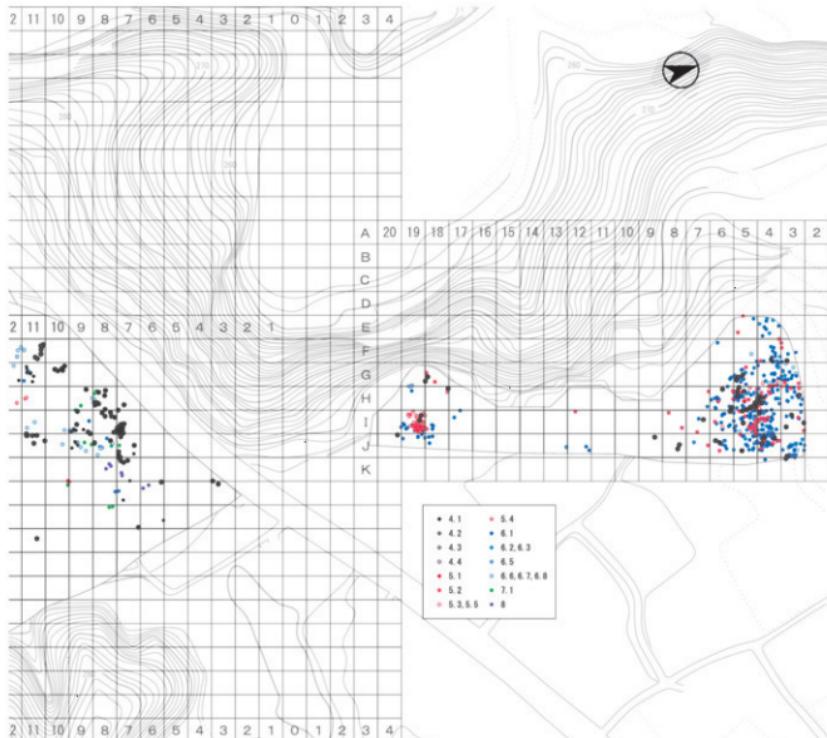
第5群土器(第264図～第273図409～461)

第5群土器に属する土器は、その施文的特徴および器形的特徴から、さらに5類に分類できた。

本群に属する土器は層位的には主にVII層を中心に出土して



第245図 純文早期土器分布図20 (1/2000)



いるが、より下層であるⅧ層や、上層のVI層やV層からも出土しており、地層の横転や後世の搅乱が激しかった区域があることが認められる。

第5群土器第1類土器(分類記号5.1、第264・265図409～412)

第5群土器第1類土器に属する土器を4点資料化した。

器形の特徴としては、口縁形態は平口縁を呈し、口縁部は若干内弯し、口唇部は水平な平坦面あるいは内傾する平坦面を作出する。また胴部は直線的にすぼまるのが特徴である。

施文の特徴としては、口縁部文様帯から胴部文様帯にかけて、貝殻もしくは櫛歯状工具による斜方向の押引文(条痕文)を横位方向に施した後に、直下の段には合わせて羽状文になるように、斜方向の押引文(条痕文)を横位方向に施すのが、本類細別の最大の特徴である。

調整方法としては、内器面では、ミガキに近い丁寧なナデ調整を行う土器や、箋状工具によるナデ調整を行う土器が多くみられた。

本類土器の胎土中鉱物としては、主に輝石や雲母で構成され、粗い粒度の鉱物を含む土器が多いのが特徴である。ここで注目できるのは、赤色の粒子が多く含まれることである。

さて、出土分布図から本類に属する土器は主に、耳取調査区北側地区的うち、特に耳取調査区G～J～4・5区周辺に集中していることを指摘できる(第248図・第262・263図参照)。この分布域は、第5群土器第2類土器や第3類土器の分布域と重なることが指摘できる。

第5群土器第2類土器(分類記号5.2、第266図～第269図413～445)

第5群土器第2類土器に属する土器を33点資料化した。

器形の特徴としては、口縁形態が平口縁を呈し、口縁部が直行して口唇部は水平な平坦面を作出する土器(第266図413、422)と、口縁部が若干内弯して口唇部は内傾する平坦面を作出する土器(第269図439、440)とがあることが指摘できる。また、胴部は直線的あるいはやや緩やかにすぼまり、底部は平底を呈するのが特徴である。

施文の特徴としては、口縁部文様帯から胴部文様帯にかけて、貝殻もしくは櫛歯状工具による斜方向の押引文(条痕文)を組み合わせて施した羽状文を、横位方向に巡らすのが、本類細別の最大の特徴である。

調整方法としては、内器面では、最終調整として丁寧なナデ調整やミガキに近い丁寧なナデ調整を行う土器が主体を占めることが挙げられる。また、直前調整として木製工具によるハケ調整の後に、最終調整としてナデ調整を行う土器も少量みられる。この特徴は、第4群土器第3類土器に親られた調整方法に近い状況であることが指摘できる。

本類土器の胎土中鉱物としては、主に角閃石や輝石、雲母で構成されるのが特徴である。

ここで注目できるのは、4点である。

第1に、量的には角閃石を含む土器が多く、黒雲母を含む

土器は少ないことが挙げられる。

第2に、角閃石も黒雲母も共に胎土中に多く含む土器であり、混和材として含ませた可能性の高いことが特徴である。

第3に、粗い粒度の鉱物を含む土器が多いのが特徴であるが、黒雲母を含む土器については、胎土が精選され、微粒のみで構成されていることが指摘できる。

第4に、黒曜石を含む土器が多いことである。また赤色の粒子が多く含まれる第5群土器第1類土器と同様であり、共に今後注意を要する。

さて、出土分布図から本類に属する土器は主に、耳取調査区北側地区的うち、特に耳取調査区E～J～3～8区周辺と、耳取調査区南側地区的うち、特に耳取調査区G～I～1～18・19区周辺とに集中していることを指摘できる(第248図・第262・263図参照)。この分布域は、耳取調査区北側地区では第5群土器第1類土器や第3類土器の分布域と重なり、耳取調査区南側地区では第5群土器第4類土器の分布域と重なることが指摘できる。

第5群土器第3類土器(分類記号5.3、第270図446～450)

第5群土器第3類土器に属する土器を5点資料化した。

本類に属する土器は、器形の特徴では第5群土器第1類土器や第2類土器に属する土器ではあるが、施文の特徴などの諸属性ではどの類にも帰属し得なかった土器である。今後注意を要する土器として、本類に細別した。

第270図446～448は深鉢形土器の口縁部資料である。

器形の特徴としては、口縁形態が平口縁を呈し、口縁部が直行して口唇部は水平な平坦面を作出する土器(第270図446)と、口縁部が直線的に外に開き口唇部は水平な平坦面を作出する土器(第270図447、448)とがあることが指摘できる。

施文の特徴としては、口縁部文様帯に貝殻もしくは櫛歯状工具による斜方向の押引文を横位方向に巡らすことが挙げられる。しかも、第5群土器第1類土器や第2類土器に比べて施文単位の長さは長く、幅は広いのが特徴である。

調整方法としては、内器面では、直前調整として木製工具によるハケ調整の後に、最終調整としてナデ調整を行う土器であり、なかには初期の調整であるケズリ調整が観られる土器もあった。

本類土器の胎土中鉱物としては、主に角閃石や輝石、雲母で構成されるのが特徴である。

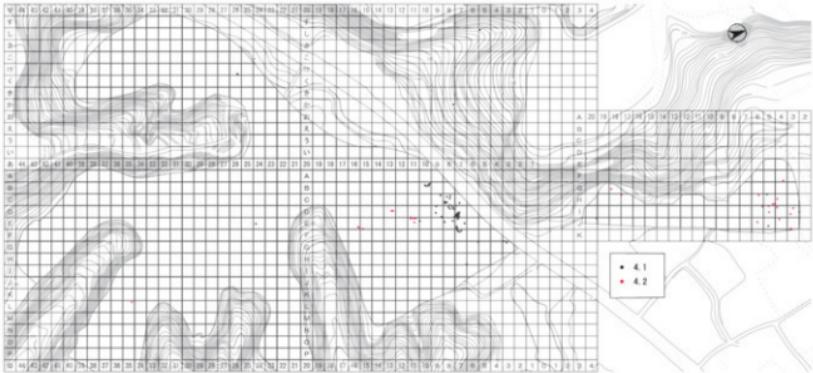
第270図449は底部資料である。

器形の特徴としては、底面が若干上げ底を呈することが、施文の特徴としては、胴部文様帯にかけて貝殻刺突文を横位方向に数条施すことが指摘できる。

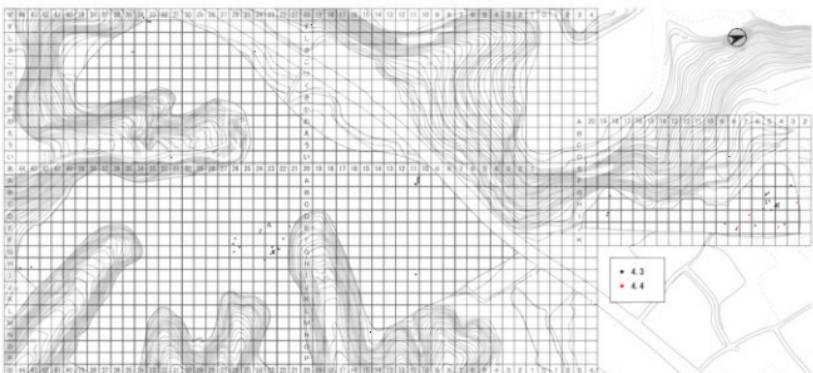
また調整方法としては、内器面では最終調整としてミガキ調整が、底面ではミガキに近い丁寧なナデ調整が行われていることが挙げられる。

本類土器の胎土中鉱物としては、主に角閃石や輝石で構成され、粗い粒度の鉱物を含む土器であるのが特徴である。

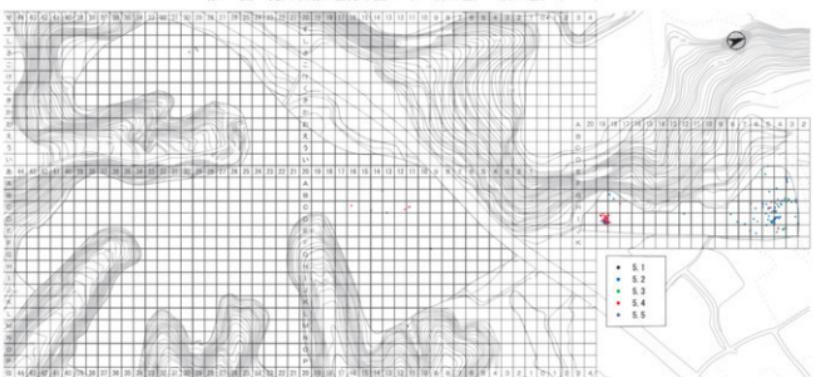
さて、出土分布図から本類に属する土器は主に、耳取調査区北側地区的うち、特に耳取調査区F～J～3～5区周辺に



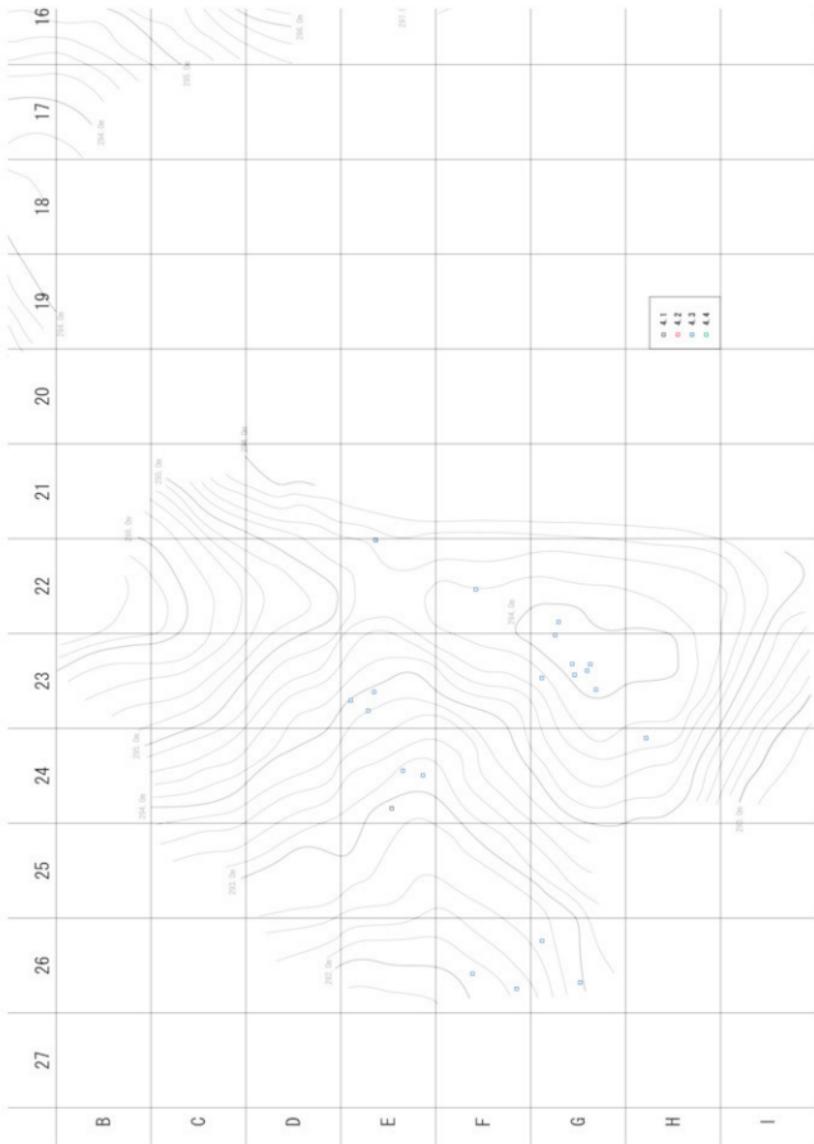
第246図 縄文早期土器分布図21 (4.1群土器/4.2群土器, 1/4000)



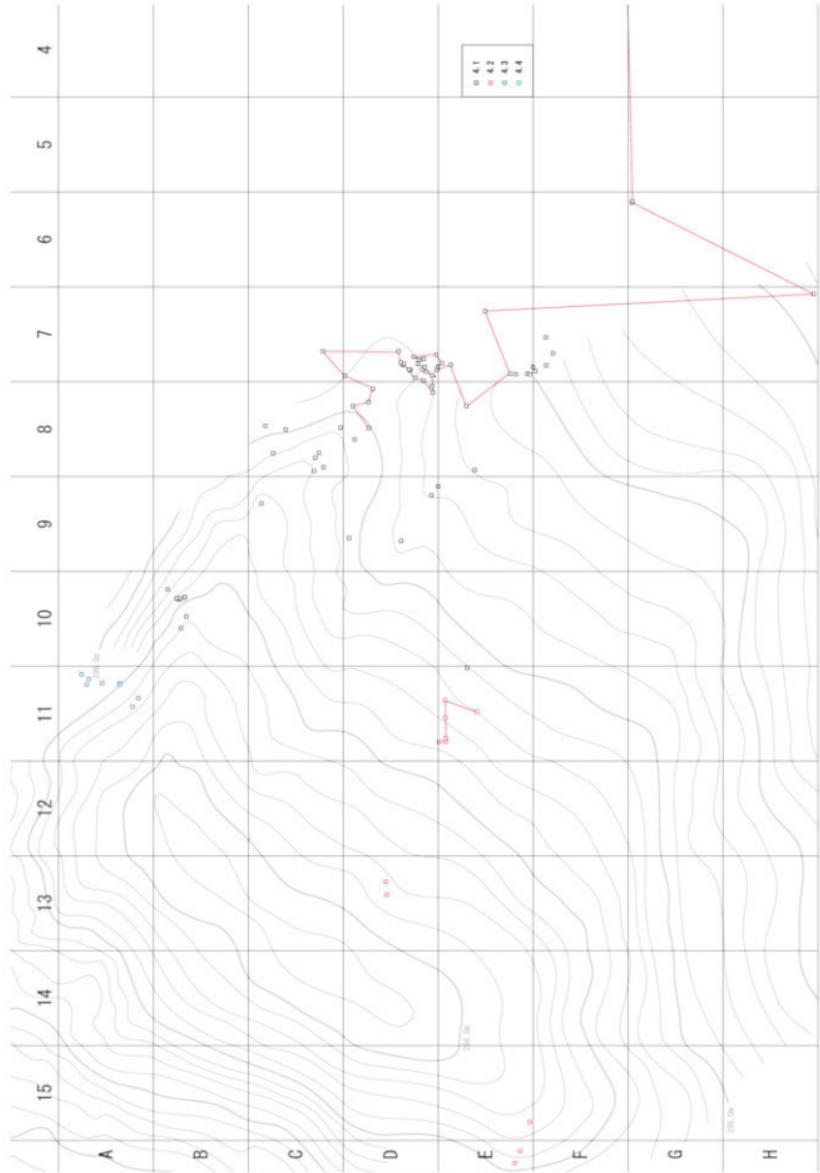
第247図 縄文早期土器分布図22 (4.3群土器/4.4群土器, 1/4000)



第248図 縄文早期土器分布図23 (5群土器, 1/4000)



第249図 縄文早期土器分布図24（第4群土器1, 1/500）



第250図 純文早期土器分布図25 (第4群土器2, 1/500)



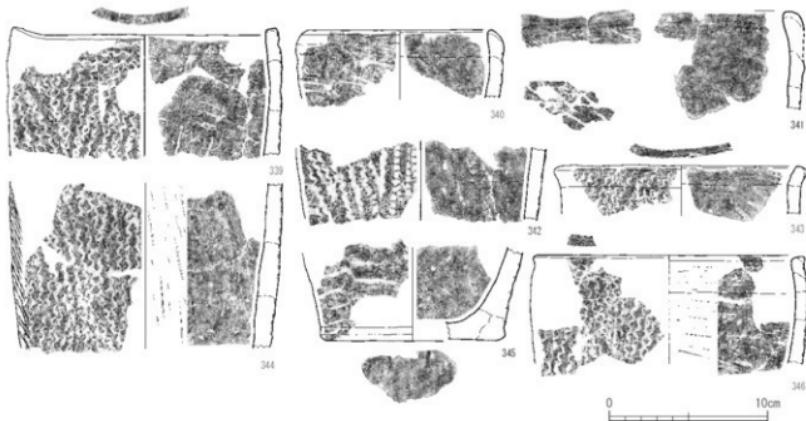
308



第251図 繪文早期土器実測図(47) (4.1群土器/桐木調査区出土)

第69表 繪文早期土器觀察表 (27) (4群土器-1)

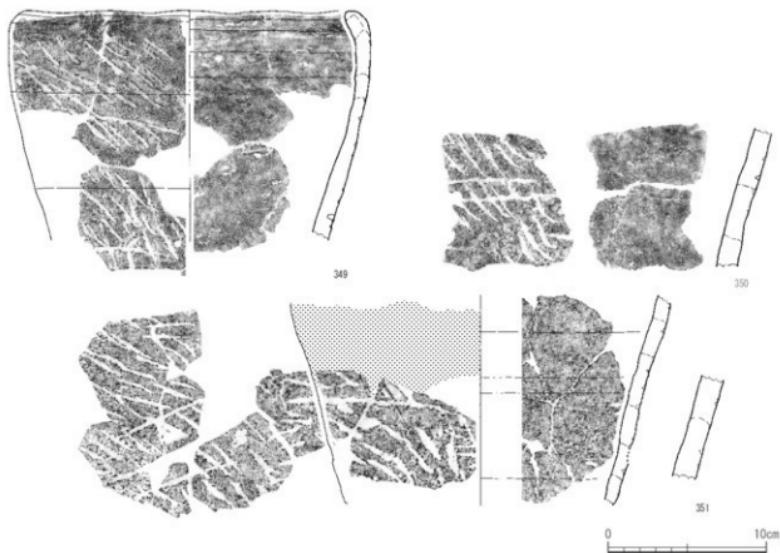
第70表 繩文早期土器觀察表 (28) (4群土器-2)



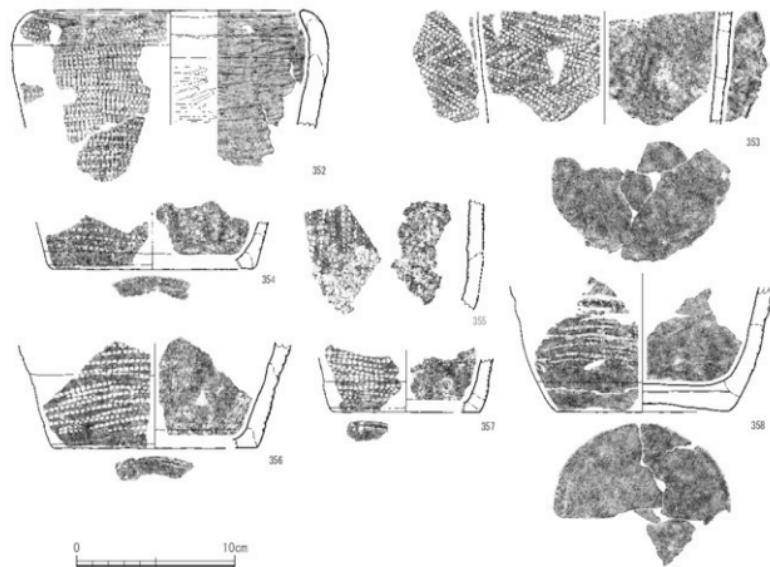
第252図 縄文早期土器実測図(48) (4.1群土器/桜木調査区出土)



第253図 縄文早期土器実測図(49) (4.1群土器/耳取調査区出土)



第254図 縄文早期土器実測図(50) (4.1群土器/桜木調査区出土)



第255図 純文早期土器実測図(51) (4.2群土器/桜木調査区出土)



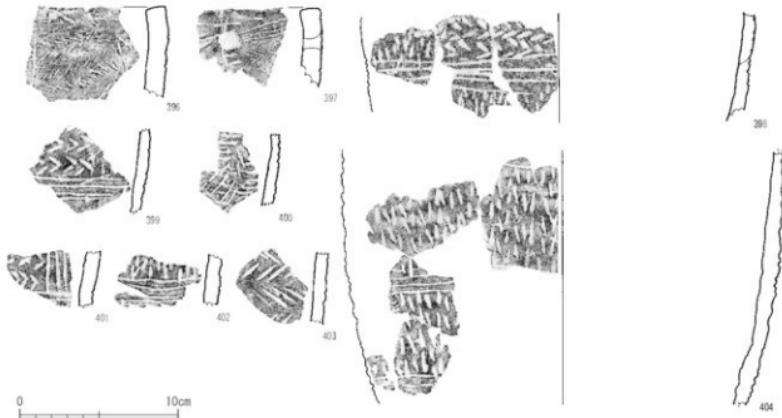
第256図 純文早期土器実測図(52) (4.2群土器/耳取調査区出土)



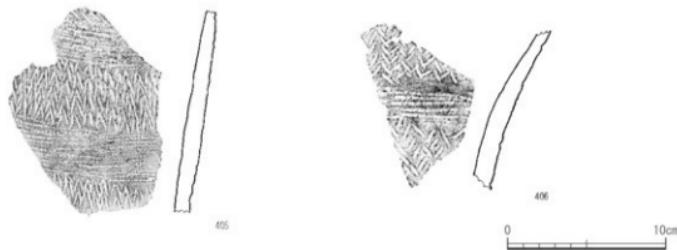
第257図 純文早期土器実測図 (53) (4.3群土器/桐木調査区出土)



第258図 縄文早期土器実測図 (54) (4.3群土器/耳取調査区出土)



第259図 縄文早期土器実測図 (55) (4.3群土器/耳取調査区出土)



第260図 縄文早期土器実測図 (56) (4.4群土器/耳取調査区出土)



第261図 縄文早期土器実測図 (57) (4.4群土器/耳取調査区出土)

第71表 縄文早期土器觀察表 (29) (4群土器-3)

集中していること(第248図・第262・263図参照)や、この分布域が耳取調査区北側地区では第5群土器第1類土器や第2類土器の分布域と重なることが指摘できる。

### 第5群土器第4類土器(分類記号5.4、第271図451~454)

第5群土器第4類土器に属する土器を4点資料化した。

器形的特徴としては、口縁形態が平口縁を呈し、口縁部が直行して口唇部は水平な平坦面を作出する土器(第271図452)と、口縁部が若干内窪して口唇部は内傾する平坦面を作出する土器(第271図451、453、454)があることが指摘できる。また、胴部は直線的に下ぼまり、底部は平底を呈するのが特徴である。これらの特徴は第5群土器第2類土器と共通する。

施文的特徴としては、口縁部文様帯から胴部文様帯にかけて、目船腹縁部に上り流水状の押引文(各痕文)を継ぎ直向ある。

第72表 縄文早期土器観察表 (30) (4群土器-4)

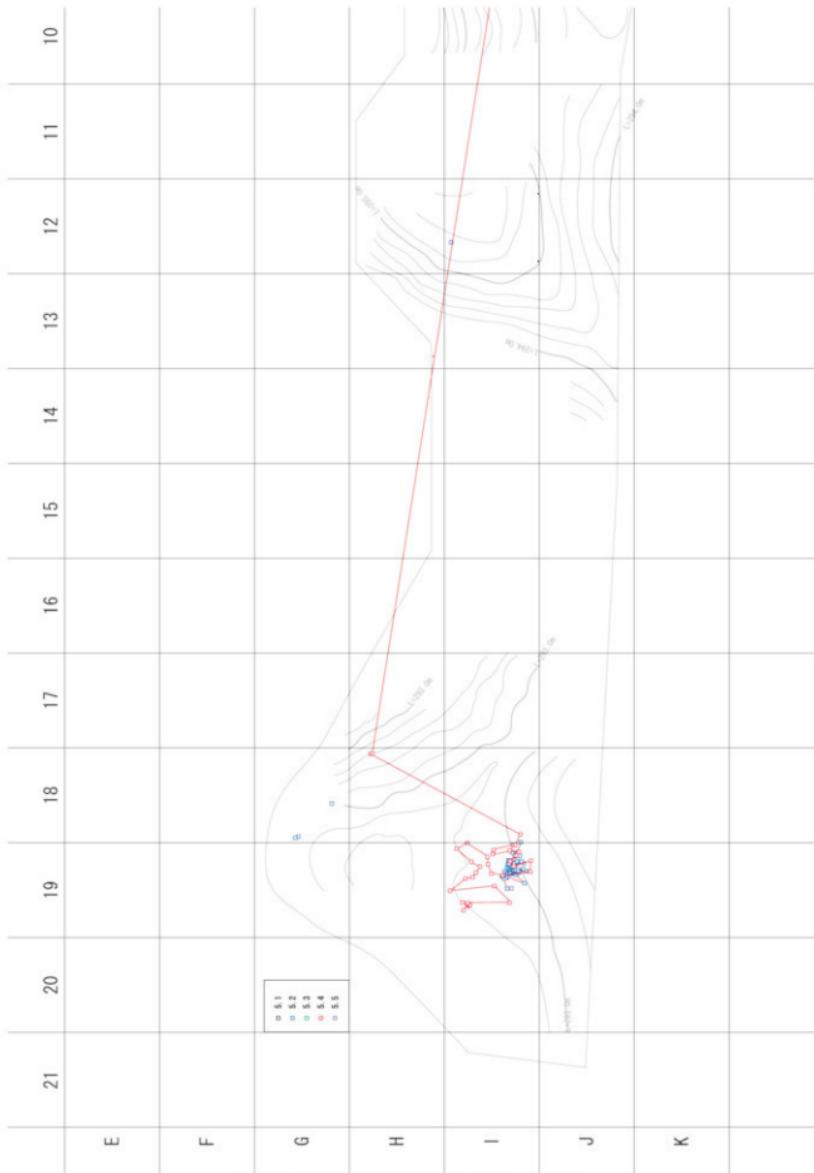
固有	固有	分類別	取扱い(ワット/年)	耕土	耕費(円)	耕費(%)	備考
377	377	4.3	○8010(9~14歳)	高, 肥沃, 高原	ハサード	丁寧なナデ	田和H 畜産用
378	378	4.3	○8010(9~14歳)	高, 肥沃, 高原	ハサード	丁寧なナデ	田和H 畜産用
379	379	4.3	○8010(9~14歳)	高, 肥沃, 高原	ハサード	丁寧なナデ	田和H 畜産用
380	380	4.3	○8009(9~23歳)	高, 肥沃	ナデ	ナデ	田和H 畜産用
381	381	4.3	○8009(9~23歳)	高, 肥沃	ナデ	ナデ	田和H 畜産用
382	382	4.3	○8009(9~11歳)	高	ナデ	ナデ	田和H 畜産用
383	383	4.3	○8007(9~26歳)	高, 肥沃	-	-	田和H 多量, 畜産用
384	384	4.3	○8007(9~26歳)	高, 肥沃	ハサード	丁寧なナデ	田和H 畜産用
385	385	4.3	○8007(9~26歳)	高, 肥沃	ナデ	ナデ	田和H 畜産用
386	386	4.3	○8007(9~23歳)	高, 肥沃	ナデ	ナデ	田和H 畜産用
387	387	4.3	○8011(9~25歳)	高, 肥沃, 高原	ナデ	ナデ	田和H 畜産用 多量
388	388	4.3	○8011(9~25歳)	高, 肥沃, 高原	ナデ	ナデ	田和H 畜産用 多量
389	389	4.3	○8004(9~23歳)	高, 肥沃	ナデ	ナデ	田和H 畜産用
390	390	4.3	○8004(9~23歳)	高, 肥沃	ナデ	ナデ	田和H 畜産用
391	391	4.3	○8004(9~23歳)	高, 肥沃	ナデ	ナデ	田和H 畜産用
392	392	4.3	○8004(9~23歳)	高, 肥沃	ナデ	ナデ	田和H 畜産用
393	393	4.3	○8004(9~23歳)	高, 肥沃	ナデ	ナデ	田和H 畜産用
394	394	4.3	△8006(9~14歳)	高, 肥沃, 高原	ナデ	ナデ	田和H 畜産用
395	395	4.3	△8006(9~14歳)	高, 肥沃, 高原	ナデ	ナデ	田和H 畜産用
396	396	4.3	△8006(9~14歳)	高, 肥沃, 高原	ナデ	ナデ	田和H 畜産用
397	397	4.3	△8006(9~14歳)	高, 肥沃, 高原	ナデ	ナデ	田和H 畜産用
398	398	4.3	△8006(9~14歳)	高, 肥沃, 高原	ナデ	ナデ	田和H 畜産用
399	399	4.3	△8006(9~14歳)	高, 肥沃, 高原	ナデ	ナデ	田和H 畜産用
400	400	4.3	△8006(9~14歳)	高, 肥沃, 高原	ナデ	ナデ	田和H 畜産用
401	401	4.3	△8006(9~14歳)	高, 肥沃, 高原	ナデ	ナデ	田和H 畜産用
402	402	4.3	△8006(9~14歳)	高, 肥沃, 高原	ナデ	ナデ	田和H 畜産用
403	403	4.3	△8006(9~14歳)	高, 肥沃, 高原	ナデ	ナデ	田和H 畜産用
404	404	4.3	△8006(9~14歳)	高, 肥沃, 高原	ナデ	ナデ	田和H 畜産用
405	405	4.4	△8008(4~14歳)	高, 肥沃, 高原	ナデ	ナデ	田和H 畜産用
406	406	4.4	△8005(4~14歳)	高, 肥沃, 高原	ナデ	ナデ	田和H 畜産用
407	407	4.4	△7037(4~14歳)	高, 肥沃, 高原	ナデ	ナデ	田和H 畜産用
408	408	4.4	△7034(4~14歳)	高, 肥沃, 高原	ナデ	ナデ	田和H 畜産用

るいは斜方向に施すのが、本類細別の最大の特徴である。

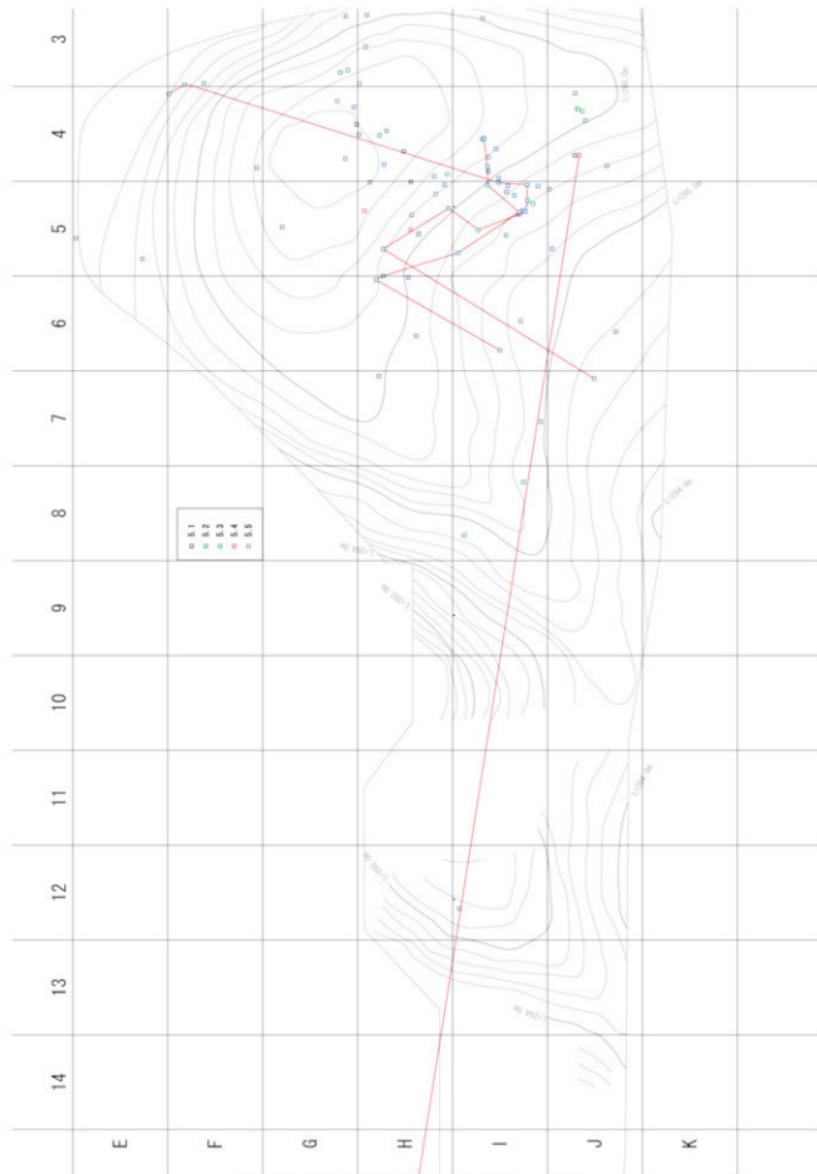
調整方法としては、内器面では、最終調整として丁寧なナデ調整やミガキに近い丁寧なナデ調整を行う土器が主体を占めることが挙げられる。また、直前調整として木製工具によるケズり調整やハケ調整の後に、最終調整としてナデ調整を行う土器も少量みられる。この特徴は、第5群土器第2類土器や第4群土器第3類土器に親られた調整方法に近い状況であることが指摘できる。

本類土器の胎土中鉱物としては、主に角閃石や輝石、雲母などで構成されるのが特徴である。また胎土が精選され、細かい粒度の鉱物を含むか、微粒のみで構成される土器が多く、第5群土器の中でも、胎土が精選されている土器群である。

さて、出土分布図から本類に属する土器は主に、耳取調査区南側地区のうち、特に耳取調査区 I-18・19 区周辺と、相



第262図 純文早期土器分布図26（第5群土器 1. 1/500）



第263図 縄文早期土器分布図27 (第5群土器2, 1/500)

木調査区北側地区のうち、特に桐木調査区B・C-11～16区周辺に集中していることを指摘できる(第248図・第262・263図参照)。この分布域は、耳取調査区南側地区では第5群土器第2類土器の分布域と重なり、桐木調査区北側地区では第5群土器のなかでは重なる土器がないことが指摘できる。

#### 第5群土器第5類土器(分類記号5.5、第272・273図455～461)

第5群土器第5類土器に属する土器を7点資料化した。内外面ともに無文の土器である。いずれも胴部下半から底部にかけての資料であり、全体は不明である。器形的特徴としては、胴部は直線的あるいはやや緩やかにすぼまり、底部は平底を呈するのが特徴である。調整方法としては、内器面では、最終調整としてナデ調整を行う土器が主体を占めることが挙げられる。直前調整として木製工具によるハケ調整を行なう土器や、ケズリ調整の痕跡が観られることが指摘できる。本類土器の胎土中鉱物としては、主に輝石、雲母で構成され、特に胎土中に粗い粒度の鉱物を多く含むのが特徴である。また、角閃石を含む土器と黒雲母を含む土器があることが指摘できる。さて、出土分布図から本類に属する土器は、主に耳取調査区北側地区のうち、特に耳取調査区G～I-4～6区周辺と、主に桐木調査区西側地区のうち、特に桐木調査区さ～29～30区周辺に集中していることを指摘できる(第249図・第262・263図参照)。

#### 第6群土器(第282図～第343図462～768)

第6群土器に属する土器は、押型文土器である。

本群に属する土器は層位的には主にⅦ層を中心に出土している。また、より下層であるⅧ層や、上層のⅥ層やⅤ層からも出土しており、地層の横転や後世の搅乱が激しかった区域があることが認められる。

本群に属する土器は、下記のように器形的特徴から、さらに8類に分類できた。

第1類土器は口縁部内部が屈曲しない土器である。

第2類土器は口縁部内部が弱く屈曲する土器である。

第3類土器は口縁部内部が屈曲する土器である。

第4類土器は特殊土器である。

第5類土器は口縁部が外に開き、胴部外面が弯曲する土器である。

第6類土器は口唇上端部が内傾する平坦面を作出す土器である。

第7類土器は円筒形土器に押型文を施す土器である。

第8類土器は円筒形条痕文土器に押型文を施す土器である。

以下順次、報告を行うこととする。

#### 第6群土器第1類土器(分類記号6.1、第282図～第308図462～624、第318図～第320図682～692)

第6群土器第1類土器に属する土器を174点資料化した。

第6群土器第1類土器は、口縁部内部が屈曲しない土器を

指標とする。さらに、器形的特徴としては、口縁形態は概ね平口縁を呈し、口縁部は外反し、胴部中央部で若干膨らみ、胴部下半部ではすぼまり、底部は平底になることが、共通した特徴として指摘できる。

本類に属する土器は、さらに文様構成などの施文的特徴から6タイプに分類ができる。

以下順次、報告を行うこととする。

#### 第6群土器第1類土器第1タイプ土器(分類記号6.11、第282図～第287図462～502)

器形的特徴としては、口縁部は緩やかに外反し、胴部中央部は若干膨らみ、胴部下半部は直線的にすぼまり、底部は平底になることが指摘できる。また口縁形態には、平口縁を呈する土器(第282図462～464)と、波状口縁を呈する土器(第282図465～468)とがあることが挙げられる。

施文的特徴としては、口縁部文様帯から胴部文様帯にかけて外面全面に横位方向の押型文を施すのが、本タイプ土器分類の最大の指標である。また口縁部内面端部に「原体条痕」を施し、直下に横位方向の押型文を数条巡らす土器である。

また本タイプ土器には、山形押型文を施す第1種土器(分類記号6.111、第282・283図462～477、第285図486～493)と、横円押型文を施す第2種土器(分類記号6.112、第284図478～485、第286・287図494～502)との2種類の土器がある。

ここで注目できるのは、本タイプ土器に施される押型文は、第1類土器第1タイプ土器以外の類やタイプに帰属する土器に施される押型文より、文様が微細なことが挙げられる。

調整方法としては、内器面では、直前調整として木製工具によるハケ調整の後に、最終調整としてナデ調整を行う土器が主体を占めることが挙げられる。また、ケズリ調整の痕跡をとどめる土器や、直前調整として跨ナデ調整を行なう土器や、ミガキに近い丁寧なナデ調整を行なう土器も観られた。

ここで注目できるのは、第6群土器第1類土器全般に共通して、調整方法に大きな違いが観られる特徴である。

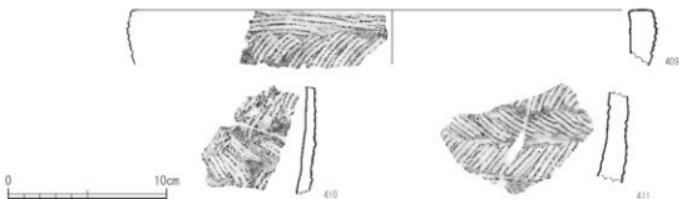
この調整方法において大きな違いが生じる原因の1つとして、部位による違いが挙げられる。口縁部内面は丁寧なナデ調整まで行き、胴部上半では直前調整としてケズリを行った後に、最終調整として粗いナデ調整を行い、胴部下半では直前調整として綾方向もしくは斜位方向のケズリ調整の後に、最終調整として丁寧なナデ調整を行なう土器が、本タイプ土器に帰属する土器のなかには観られる。この状況が普遍性があることなのか、今後注意を要する。

さらに外器面では、押型文施文後にナデ調整を行なうのは、第6群土器では本タイプ土器だけであり、注目できる。

本タイプ土器の胎土中鉱物としては、主に角閃石や輝石で構成されるのが特徴である。注目できるのは3点である。

まず量的には、角閃石を含む土器が多く、黒雲母を含む土器は少ないことが挙げられる。

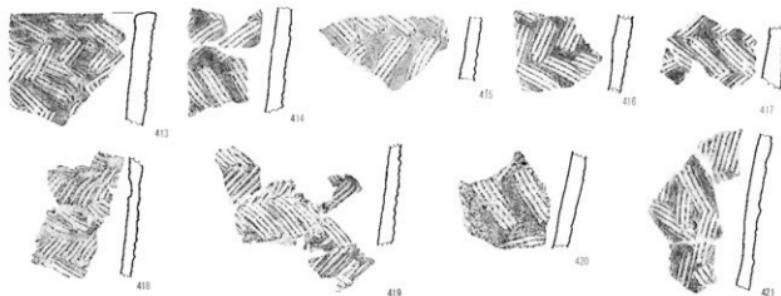
つぎに、角閃石も黒雲母も共に胎土中に多く含む土器であり、混和材として含まれた可能性の高いことが特記できる。



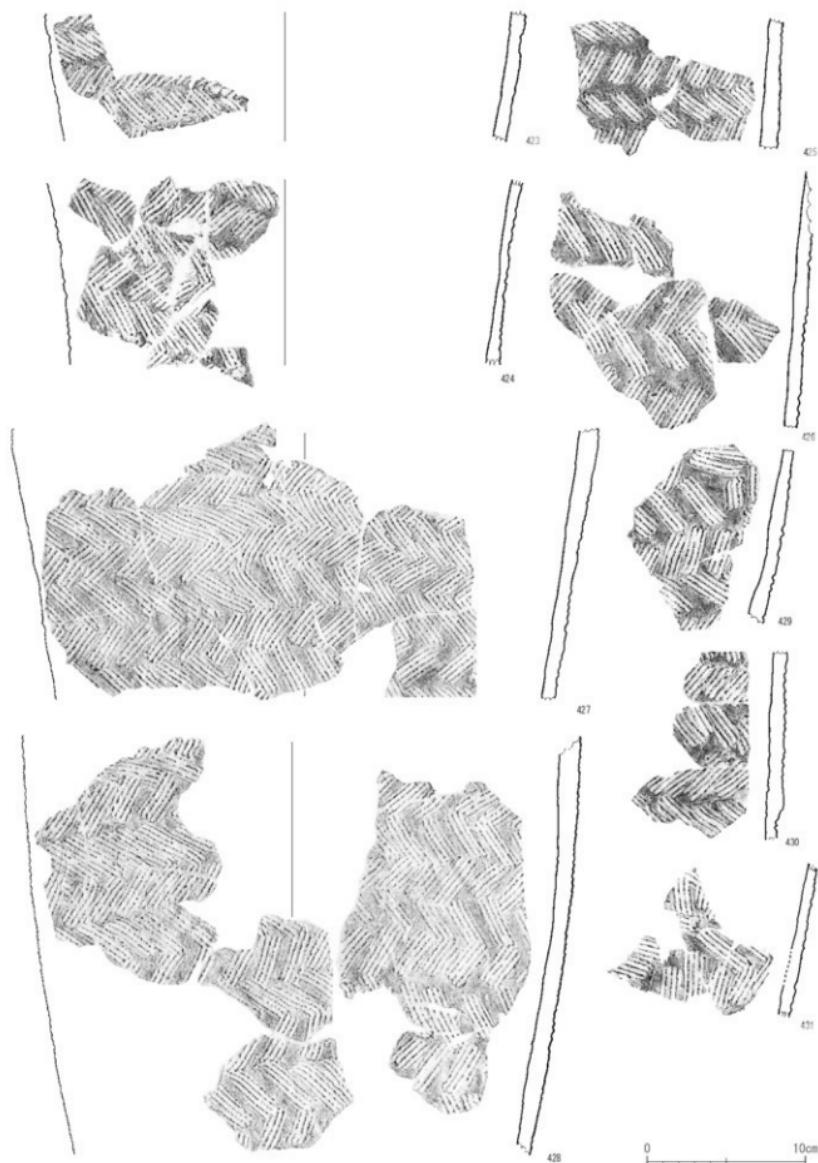
第264図 縄文早期土器実測図(58) (5.1群土器/耳取調査区出土)



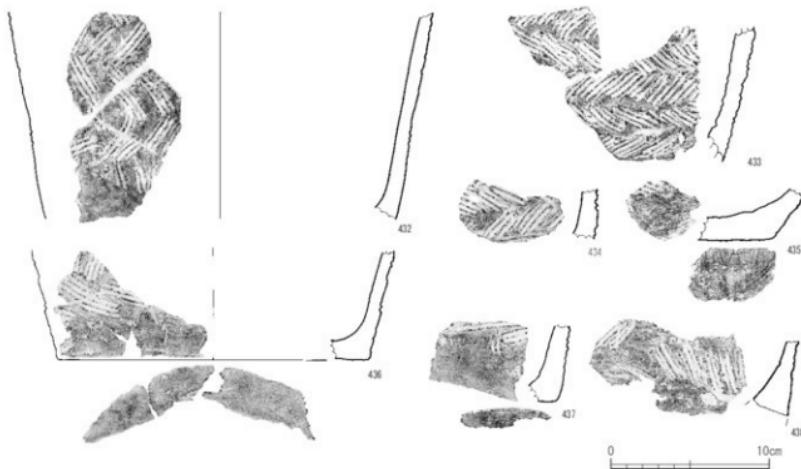
第265図 縄文早期土器実測図(59) (5.1群土器/桐木調査区出土)



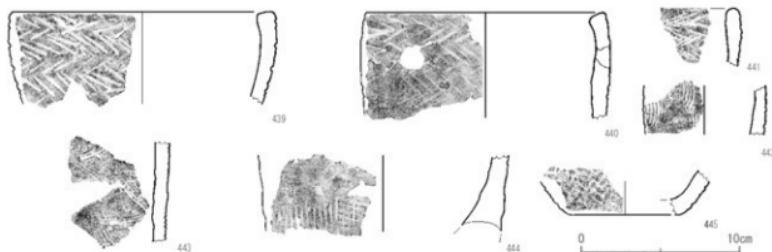
第266図 縄文早期土器実測図(60) (5.2群土器/耳取調査区出土)



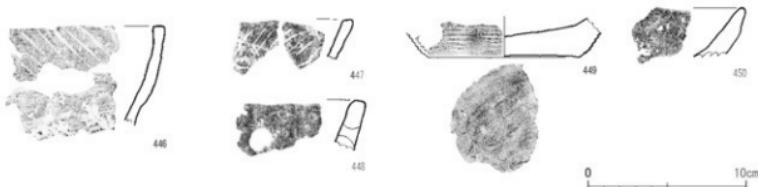
第267図 純文早期土器実測図 (61) (5.2群土器/耳取調査区出土)



第268図 縄文早期土器実測図(62) (5.2群土器/耳取調査区出土)



第269図 縄文早期土器実測図(63) (5.2群土器/耳取調査区出土)



第270図 縄文早期土器実測図(64) (5.3群土器/耳取調査区出土)

さらに、粗い粒度の鉱物を含む土器が多いのが特徴であり、しかも胎土中に含まれる量が特に多い土器も多数観られた。また、黒雲母を含む土器については、胎土が精選され、微粒のみで構成されていることが指摘できる。

胎土中鉱物についての以上の特徴は、量的な割合では若干の差が認められるものの、第5群土器第2類土器や、第6群

土器第1類土器のうち第1タイプ土器から第6タイプ土器まで全般に共通している特徴である。

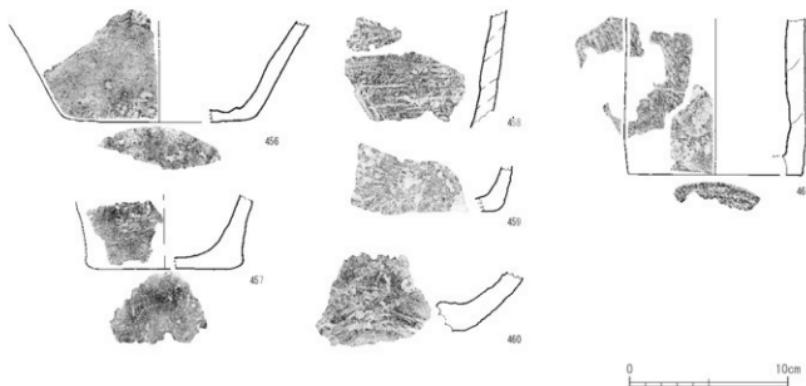
さて、出土分布図から本タイプに属する土器は主に、耳取調査区北側地区のうち、特に耳取調査区F～J-3～6区周辺と、耳取調査区南側地区のうち、特に耳取調査区I・J-17～19区周辺とに集中していることを指摘できる(第279



第271図 純文早期土器実測図 (65) (5.4群土器/耳取調査区出土)



第272図 純文早期土器実測図 (66) (5.5群土器/槇木調査区出土)



第273図 純文早期土器実測図 (67) (5.5群土器/耳取調査区出土)

第73表 紹文早期土器觀察表 (31) (5群土器-1)

第74表 红文早期土器觀察表 (32) (5群土器-2)

図・第274図～第278図参照)。

ここで注目できるのは次の3点である。

第1には、山形押型文を施す第1種土器が耳取調査区南側地区を、横円押型文を施す第2種土器が耳取調査区北側地区を主たる分布域にしていることが挙げられる。

第2には、耳取調査区南側地区を主たる分布域にしている第6群土器は、第6群土器第1類土器第1タイプ土器第1種土器のみであることが挙げられる。

第3には、耳取調査区北側地区を分布域にしている第6群土器は、第6群土器第1類土器第1タイプ土器第1種土器以外は全てであることが挙げられる。

以上のことから、本タイプ土器群のうち第1種土器と第2種土器との間に時間差がある可能性を含めて、今後注意を要する土器群である。

第6群土器第1類土器第2タイプ土器(分類記号6.12、第288図～第291図503～532、第294、295図538～548)

器形的特徴としては、口縁部形態は平口縁で、口縁部は外反し、胴部中央部は若干膨らみ、胴部下部では緩やかにすぼまり、底部は平底になることが指摘できる。

この全体的特徴は、第3、4、5タイプ土器に共通する。

口縁部形態には4種類ある。第1は、長めの口縁部が緩やかに外反する土器(第288図503、504)である。第2は、短めの口縁部が緩やかに外反する土器(第294図538～541)である。第3は、短めの口縁部が急激に外反する土器(第289図505)である。第4は、長めの口縁部が急激に外反する土器(第290図509、512)である。この口縁部形態の差が形式差になるのかは不明である。

施的的特徴としては、口唇部文様帯には横位方向の押型文を施すことが指摘できる。口縁部文様帯から胴部文様帯にかけて外面全面に縱位方向の押型文を施すのが、本タイプ土器分類の最大の指標である。また、口縁部内面には横位方向の押型文を1条から数条巡らす土器が主体を占めている。ただし本タイプ土器に帰属する土器のなかには、口縁部内面に棒状工具による刺突文を1列から2列横位置方に巡らす土器(第294図538、540、541)が観られる。また本タイプ土器には、横円押型文を施す第1種土器(分類記号6.121、第288図～第291図503～532)と、山形押型文を施す第2種土器(分類記号6.122、第294、295図538～548)との2種類の土器がある。

調整方法や本タイプ土器の胎土中鉱物についての状況は、他の第6群土器第1類土器とほぼ同様である。

さて、出土分布図からは次の2点が注目できる。

第1には、本タイプ土器は主に、耳取調査区北側地点のうち、特に耳取調査区F～K～3～6区周辺に集中していることである(第280図・第274図～第278図参照)。

第2には、桐木調査区西側地区S～I～19～32区の範囲内と桐木調査区南側地区C～E～24～25区の範囲内とでは部分的に出土していることを指摘できる。

第6群土器第1類土器第3タイプ土器(分類記号6.13、第

292、293図533～537、第296図549～556)

器形的特徴としては、第2タイプ土器と共通することが指摘できる。口縁部形態には、短めの口縁部が緩やかに外反する土器(第296図549)と、短めの口縁部が急激に外反する土器(第292図533)がある。

施的的特徴としては、口唇部文様帯には横位方向の押型文を施すことが指摘できる。口縁部文様帯から胴部文様帯の上半部にかけて外面には縦位方向の押型文を施し、胴部文様帯の下半部から底部にかけては横位方向の押型文を施すのが、本タイプ土器分類の最大の指標である。さらに口縁部内面には、横位方向の押型文を1条から数条巡らす土器である。また本タイプ土器には横円押型文を施す第1種土器と、山形押型文を施す第2種土器がある。

ここで注意を要するのは、次の2点である。

第1は、口縁部文様帯から胴部文様帯の上半部にかけての器形的特徴ならびに施的的特徴は、第6群土器第1類土器第2タイプ土器と共通することである。したがってこの部位だけでは、第2タイプ土器に帰属する土器であるのか、第3タイプ土器に帰属する土器であるのか、現在のところ判別は困難である。

第2は、口縁部文様帯から胴部文様帯の下半部にかけての器形的特徴ならびに施的的特徴は、第6群土器第1類土器第4タイプ土器と共通することである。したがってこの部位だけでは、第2タイプ土器に帰属する土器であるのか、第4タイプ土器に帰属する土器であるのか、現在のところ判別は困難である。

調整方法や本タイプ土器の胎土中鉱物についての状況は、他の第6群土器第1類土器とほぼ同様である。

さて、出土分布図から本タイプに属する土器は主に、耳取調査区北側地点のうち、特に耳取調査区E～K～3～6区周辺に集中していること、第1種土器が桐木調査区西側地区的さ～31区周辺で出土していることを指摘できる(第281図・第274図～第278図参照)。

第6群土器第1類土器第4タイプ土器(分類記号6.14、第291、298図557～560)

器形的特徴としては、第2タイプ土器と共通することが指摘できる。口縁部形態は、短めの口縁部が緩やかに外反する土器である。

施的的特徴としては、口唇部文様帯には横位方向の押型文を施すことが指摘できる。口縁部文様帯から胴部文様帯の上半部にかけて外面には斜位方向の押型文を施し、胴部文様帯の下半部から下端部では横位方向の押型文を施すのが、本タイプ土器分類の最大の指標である。さらに口縁部内面には横位方向の押型文を1条から数条巡らす土器である。また本タイプ土器には横円押型文を施す第1種土器が出土した。

調整方法や本タイプ土器の胎土中鉱物についての状況は、他の第6群土器第1類土器とほぼ同様である。

さて、出土分布図から本タイプに属する土器は主に、耳取調査区北側地区的うち、特に耳取調査区H～6区周辺に集

中している状況と、G～J-3～6区の範囲内で部分的に出土している状況を指摘できる(第299図・第274図～第278図参照)。

第6群土器第1類土器第5タイプ土器(分類記号6.15、第302・303図561～576)

器形的特徴としては、第2タイプ土器と共通することが指摘できる。口縁部形態は、短めの口縁部が急激に外反する土器である。

施文的特徴としては、口唇部文様帶には横位方向の押型文を施すことが指摘できる。口縁部文様帶から胴部文様帶全面にかけて外面には斜位方向の押型文を施すのが、本タイプ土器分類の最大の指標である。さらに口縁部内面に横位方向の押型文を1条から数条巡らす土器である。また本タイプ土器には山形押型文を施す第2種土器のみが出土した。

調整方法や本タイプ土器の胎土中鉱物についての状況は、他の第6群土器第1類土器とはほぼ同様である。ここで注目できるのは、第6群土器第1類土器のなかで本タイプ土器には、黒曜石を含む土器が多い傾向が認められることがある。

さて、出土分布図からは次の2点が注目できる。

第1には、本タイプに属する土器は主に、耳取調査区北側地区的うち、特に耳取調査区G～J-3～6区周辺に集中していることである(第300図・第274図～第278図参照)。

第2には、桐木調査区北側地区B-11区の範囲内と、桐木調査区西側地区さ-31～33区の範囲内とでは部分的に出土していることを指摘できる。

第6群土器第1類土器第6タイプ土器(分類記号6.16、第304図～第308図577～624)

器形的特徴としては、第2タイプ土器と概ね共通することが指摘できる。口縁部形態は平口縁を呈する土器が主体を占めたが、緩やかな波状口縁を呈する土器(第304図577)もみられた。

また口縁部形態には概ね3種類の土器が認められた。第1は、長めの口縁部が緩やかに外反する土器(第304図577)である。第2は、短めの口縁部が緩やかに外反する土器(第304図580～584、第306図607、第308図618、619、621)である。第3は、短めの口縁部が急激に外反する土器(第304図578)である。この口縁部形態の差が、形式差になるのかは不明である。

施文的特徴としては、口唇部文様帶には横位方向の押型文を施すことが指摘できる。口縁部文様帶から胴部文様帶の上半部にかけて外面には斜位方向の押型文を施した後に、横走する縦筋文に見かけ上みえるようナデ消すのが、本タイプ土器細別の最大の指標である。また胴部文様帶の下半部から底部にかけては横位方向の押型文を施す。さらに口縁部内面に横位方向の押型文を1条から数条巡らす土器である。また本タイプ土器には楕円押型文を施す第1種土器(分類記号6.161、第304図～第306図577～609)と、山形押型文を施す第2種土器(分類記号6.162、第307・308図610～624)がある。

ここで注目できるのは、次の2点である。

第1には、口縁部内面に施される押型文の圧力が強いために、口縁部と胴部との間が屈曲する第6群土器第2類土器の形態に酷似することである。ただし、本タイプ土器では口縁部内面文様帶直下の最終調整が丁寧なナデ調整である。これに対して第2類土器では、口縁部内面文様帶直下の最終調整は粗いナデ調整であるか、直前調整であるケズリ調整の痕跡が観察できる調整である。この違いから分類を行った。

第2には、口縁部文様帶から胴部文様帶の上半部にかけて外面に、まず斜位方向の押型文を施す特徴は、その文様構成上から、第6群土器第1類土器第4タイプ土器との近似性が考えられる。しかし、第4タイプ土器には山形押型文を施す土器が認められておらず、注意を要する。

調整方法や本タイプ土器の胎土中鉱物についての状況は、他の第6群土器第1類土器とほぼ同様である。

さて、出土分布図からは次の2点が注目できる。

第1には、本タイプに属する土器は、耳取調査区北側地区的うち、特に耳取調査区E～J-3～6区周辺に集中していることである(第301図・第274図～第278図参照)。

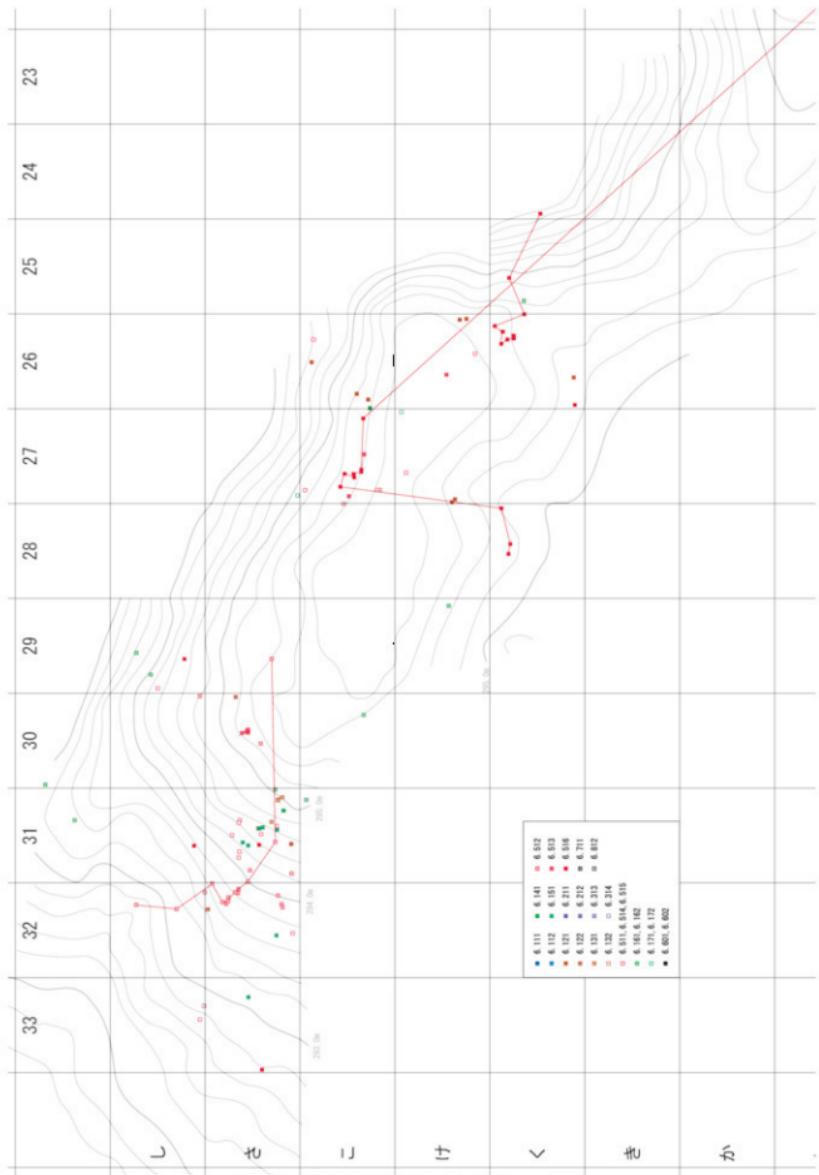
第2には、桐木調査区北側地区B～E-8～11区の範囲内と、桐木調査区西側地区さ-25～31区の範囲内とでは部分的に出土していることを指摘できる。

ここで注目できるのは、耳取調査区北側地区に集中して出土する分布域があり、桐木調査区北側地区や西側地区に広い範囲内で部分的に出土する地点があるという特徴は、第6群土器第1類土器のなかでは、外面全面に横位方向の押型文を施す第1タイプ土器と、外面に斜位方向と横位方向の押型文を施す第4タイプ土器を除く土器群に共通する特徴である。

第6群土器第1類土器第7タイプ土器(分類記号6.17、第318図～第320図682～692)

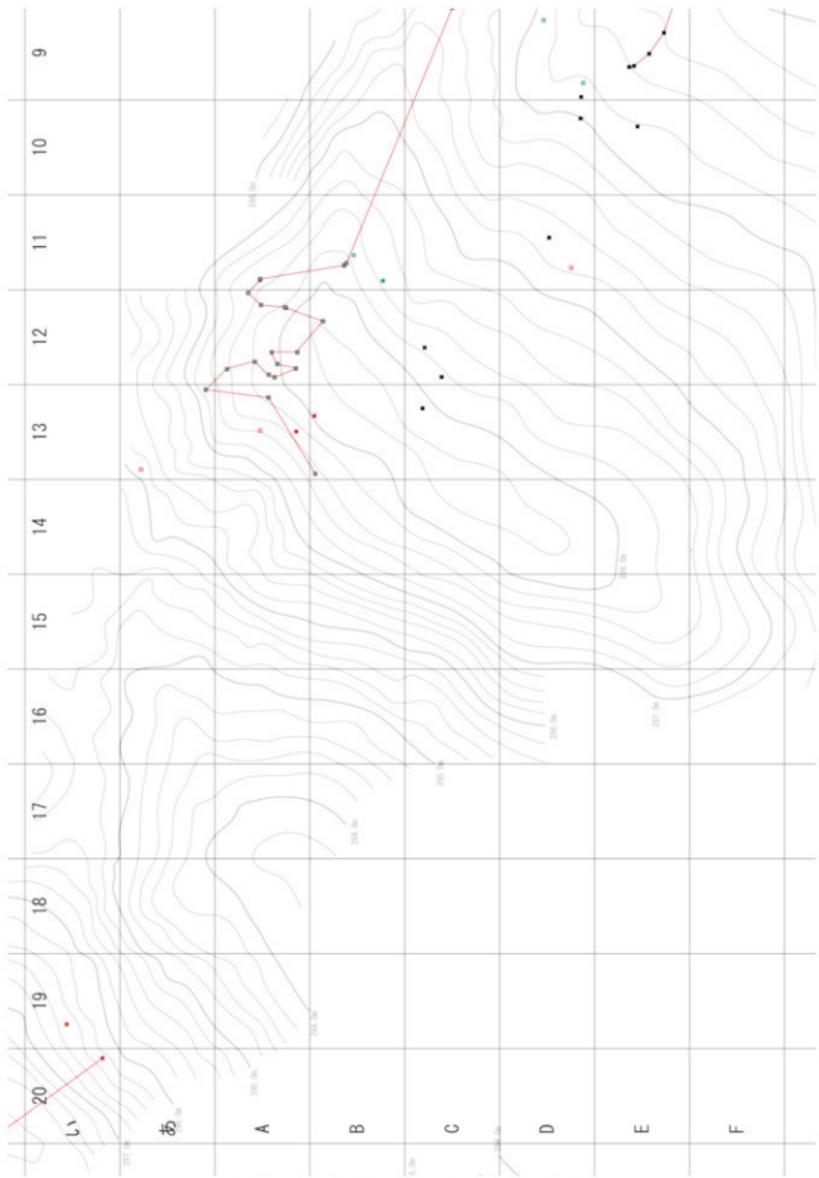
本タイプ土器は、口縁部文様帶外面が無文帯となる土器群である。器形的特徴としては口縁部が外反し、胴部中央部で若干膨らみ、施文的特徴としては口唇部文様帶には横位方向の押型文を施し、口縁部内面に横位方向の押型文を1条から数条巡らすという特徴を挙げることができる。第319図687を基本的形態とする。また本タイプ土器には楕円押型文を施す第1種土器(分類記号6.171、第318図～第320図682～688、690、692)と、山形押型文を施す第2種土器(分類記号6.172、第320図689～691)がある。

しかし本タイプ土器の分類指標には、次の2点について問題がある。第1には、器形的特徴として第2類土器に属する口縁部形態を呈する土器群(第320図688～692)や、第3類土器に属する口縁部形態を呈する土器群(第318図682～686)を含むことである。第2には、施文的特徴として胴部文様帶に縦位方向に施文する土器群(第319図687、第320図688、692)や横位方向に施文する土器群(第320図689、691)が含まれることである。このように分類上に「ぶれ」がある土器群である。したがって今後注意を要する土器群である。

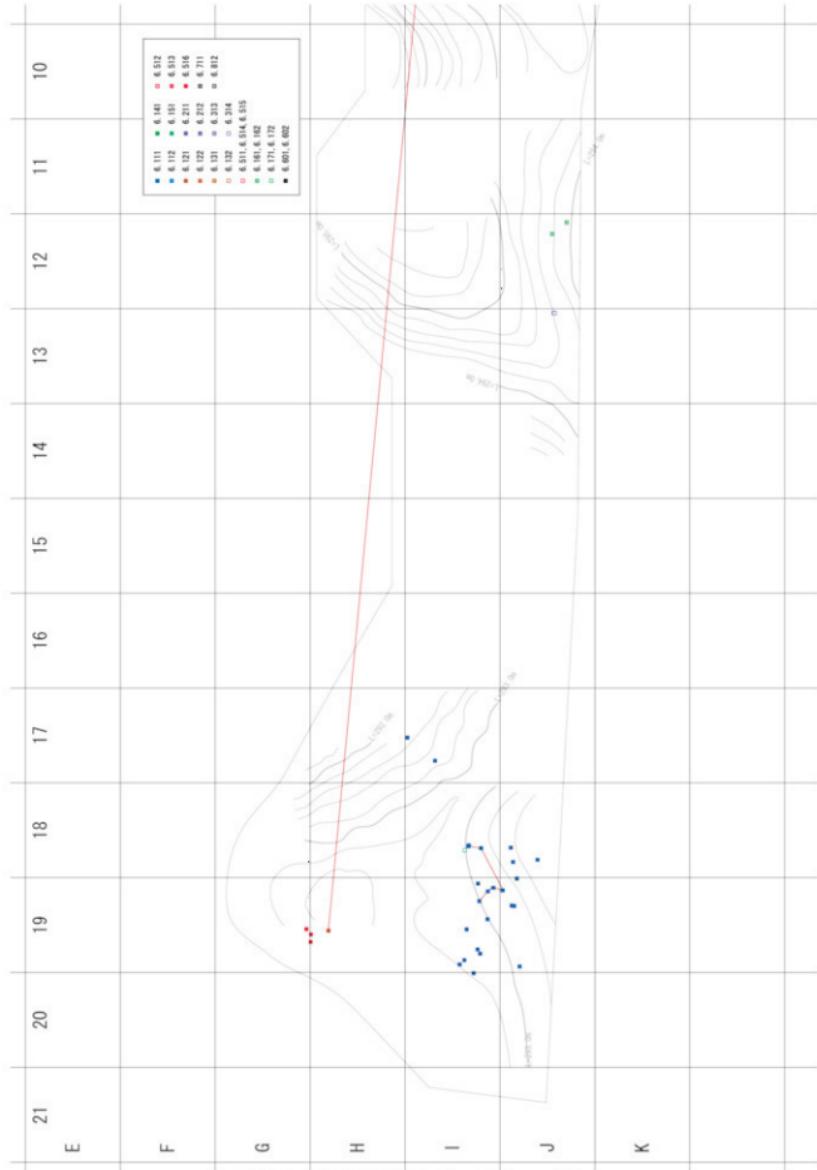


第274図 縄文早期土器分布図28（第6群土器 1. 1/500）

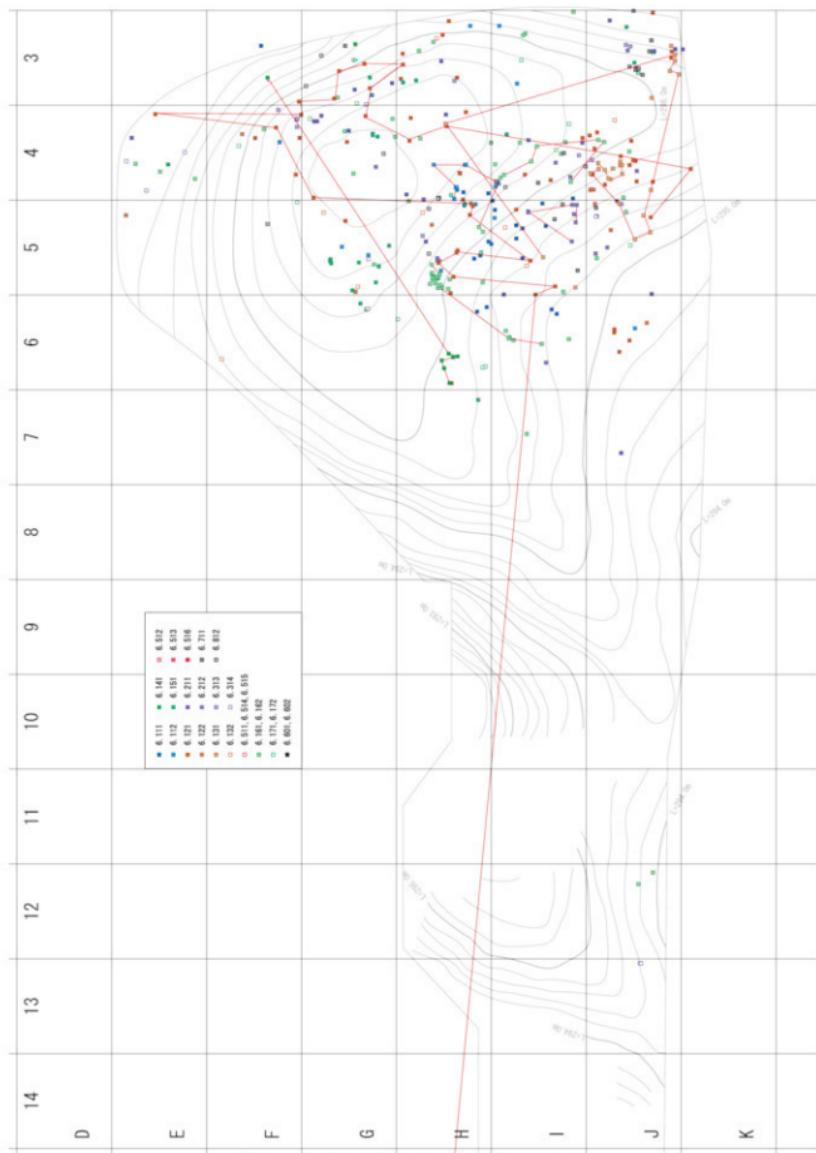
第275図 繩文早期土器分布図29（第6群土器2, 1/500）



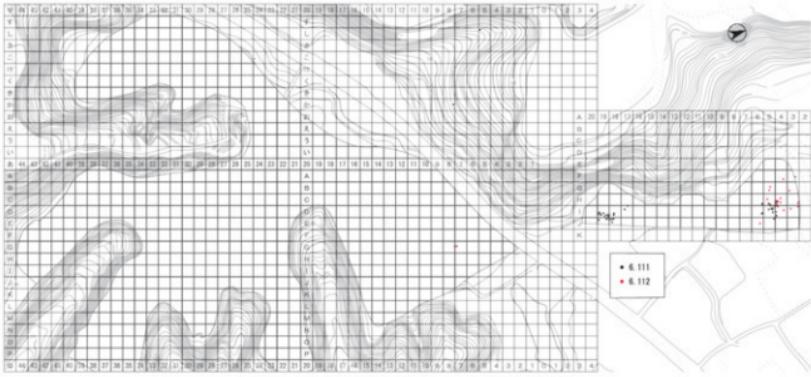
第276図 縄文早期土器分布図30（第6群土器3、1/500）



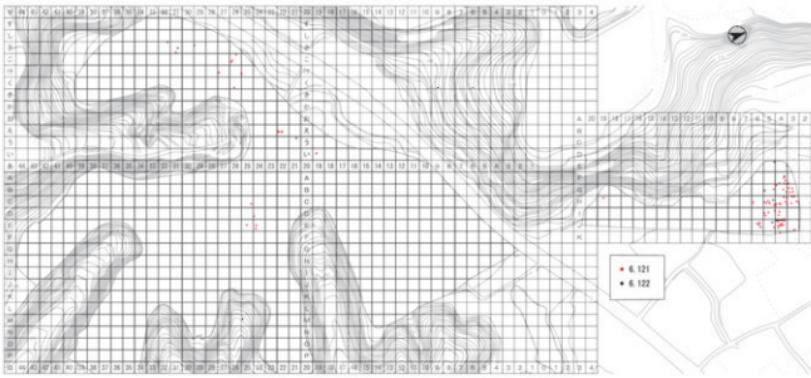
第277図 純文早期土器分布図31（第6群土器4, 1/500）



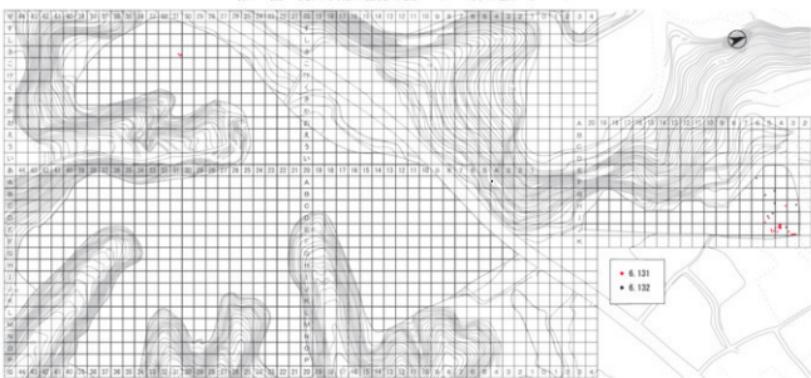
第278回 繩文早期土器分布図32（第6群土器5、1/500）



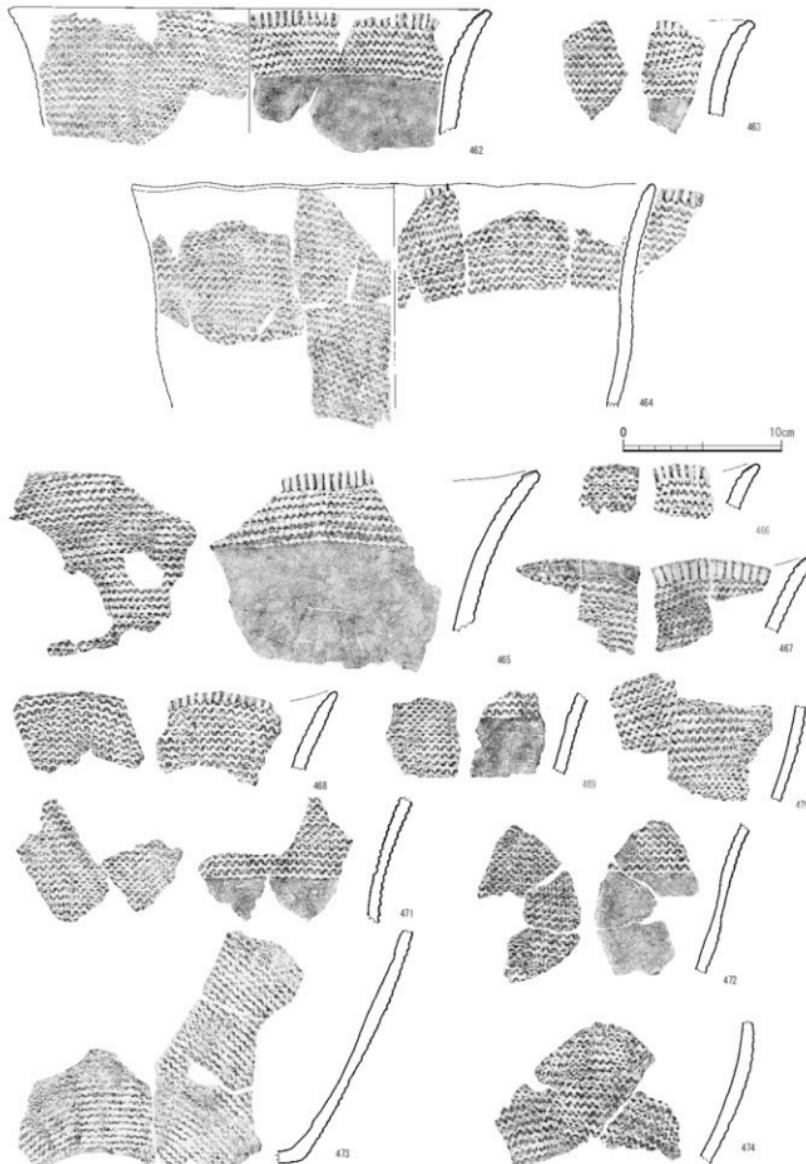
第279図 補文早期土器分布図33 (6.11群土器, 1/4000)



第280図 補文早期土器分布図34 (6.12群土器, 1/4000)



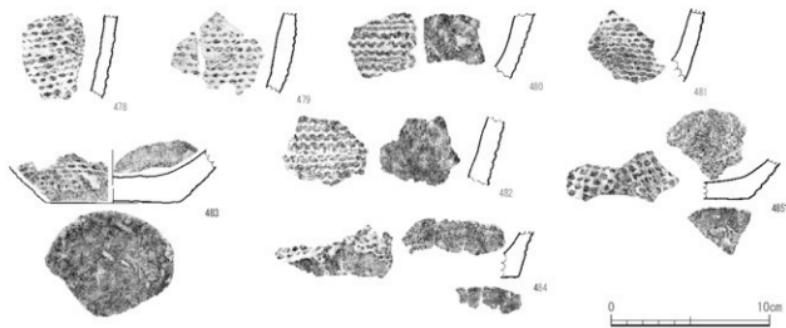
第281図 補文早期土器分布図35 (6.13群土器, 1/4000)



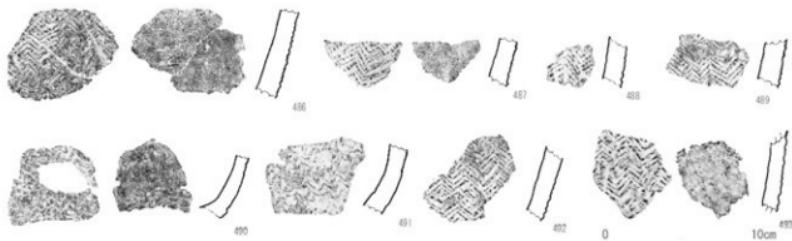
第282図 純文早期土器実測図 (68) (6. 111群土器/耳取調査区出土)



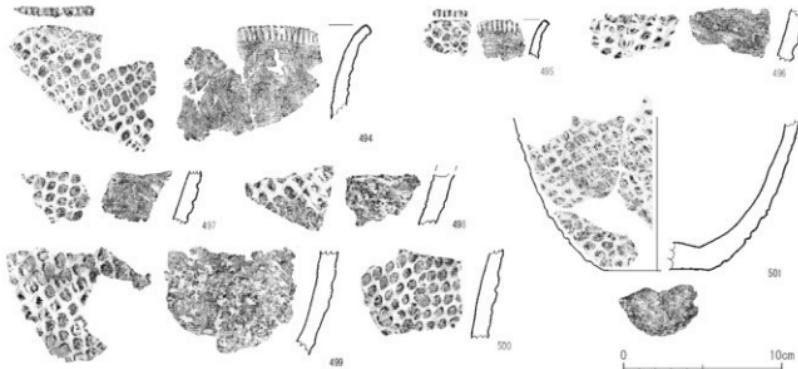
第283図 縄文早期土器実測図 (69) (6.111群土器/耳取調査区出土)



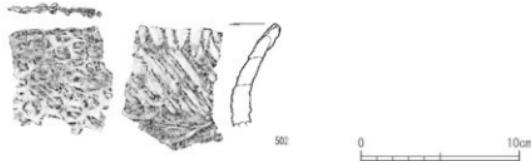
第284図 縄文早期土器実測図 (70) (6.112群土器/耳取調査区出土)



第285図 縄文早期土器実測図 (71) (6.111群土器/耳取調査区出土)



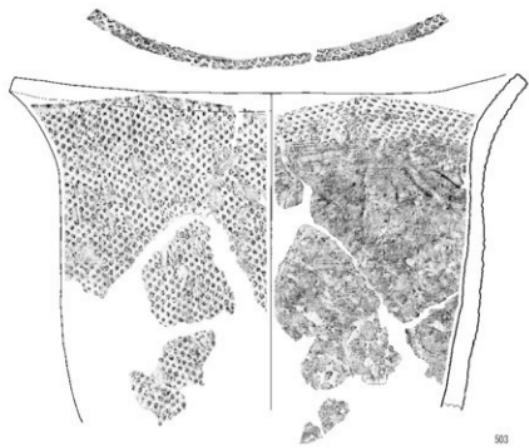
### 第286図 縄文早期土器実測図（72）（6.112群土器/耳取調査区出土）



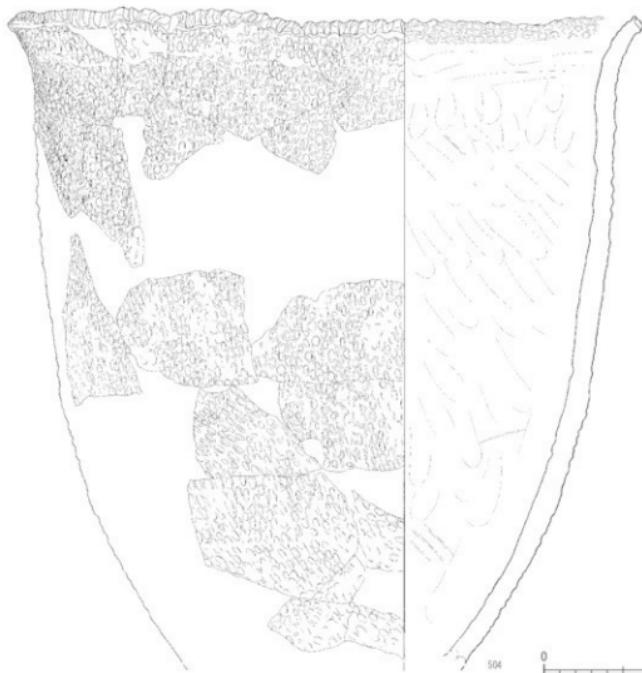
第287図 繩文早期土器実測図(73) (6.112群土器/桐木調査区出土)

第75表 縄文早期土器觀察表 (33) (6群土器- 1)

第76表 縄文早期土器觀察表 (34) (6群土器-2)



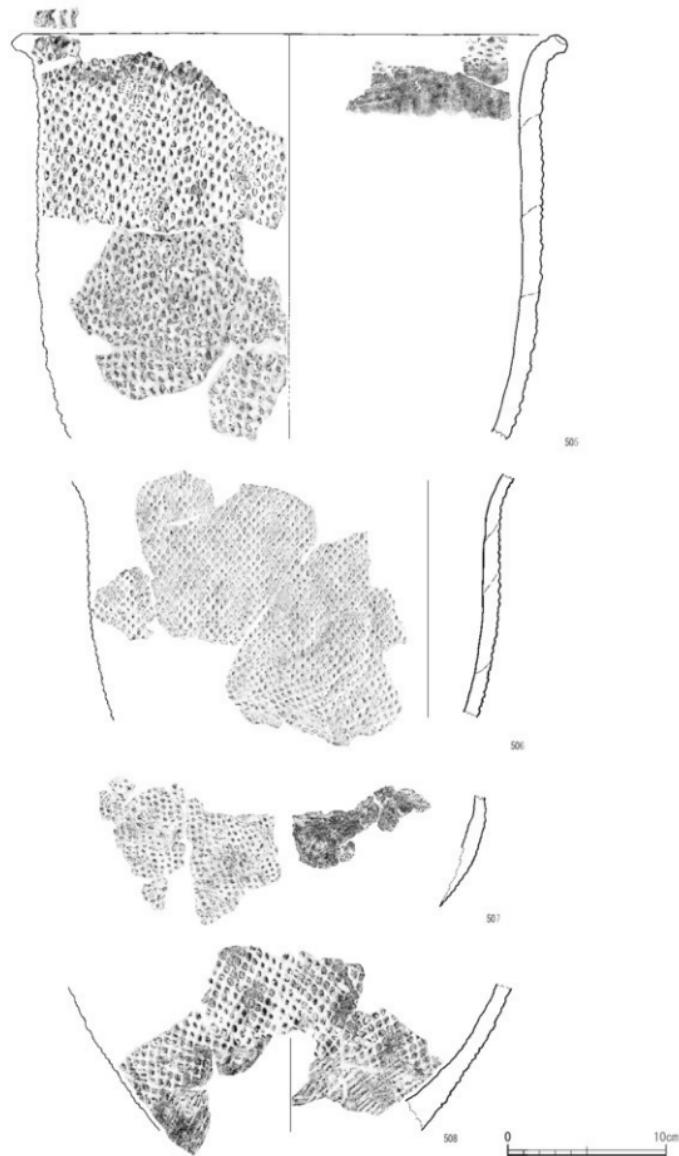
503



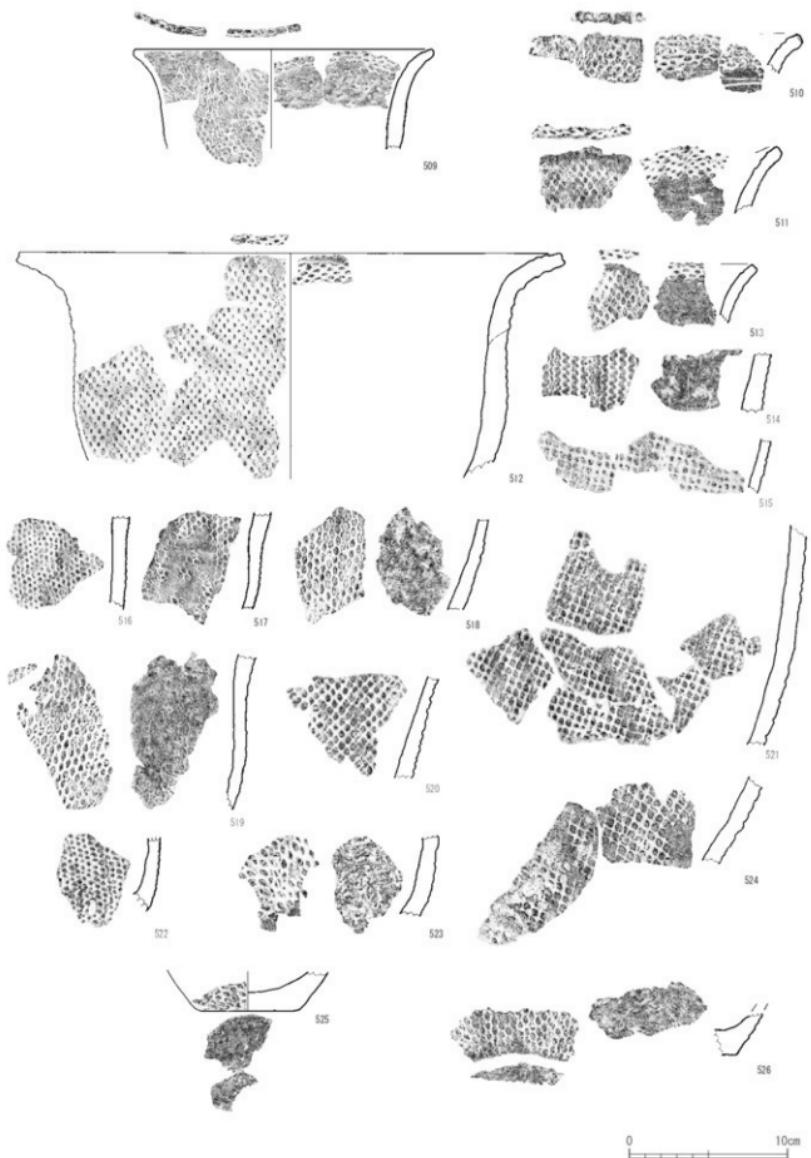
504

0 10cm

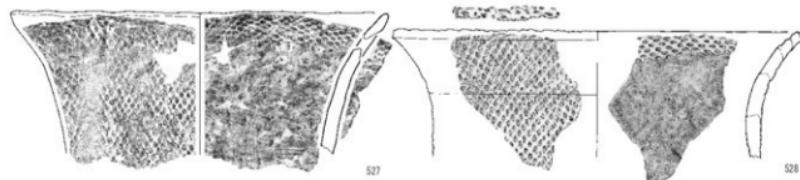
第288図 縄文早期土器実測図 (74) (6.121群土器/耳取調査区出土)



第289図 純文早期土器実測図 (75) (6. 121群土器/耳取調査区出土)

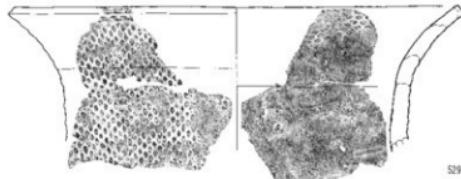


第290図 縄文早期土器実測図 (76) (6.121群土器/耳取調査区出土)

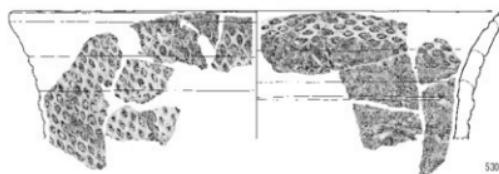


527

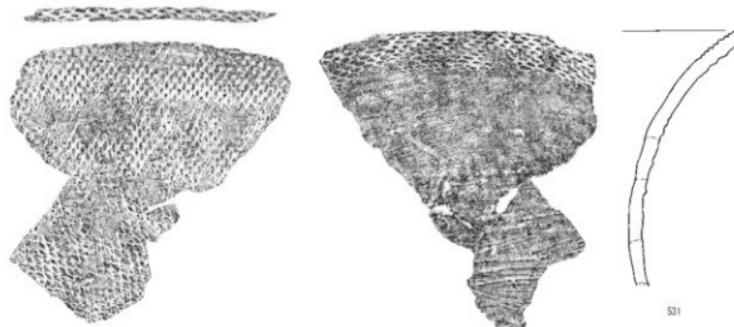
528



529



530



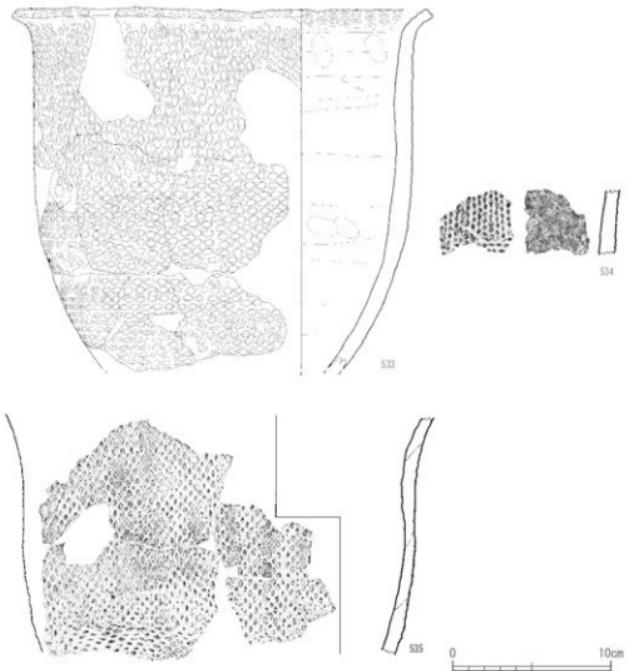
531



532

0  
10cm

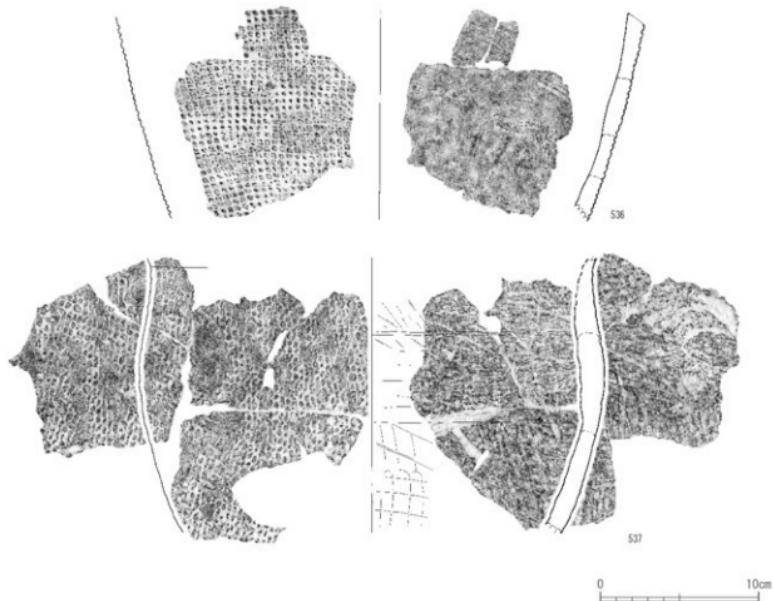
第291図 純文早期土器実測図 (77) (6.121群土器/桐木調査区出土)



第292図 繩文早期土器実測図(78) (6.131群土器/耳取調査区出土)

第77表 繩文早期土器觀察表 (35) (6群土器-3)

第78表 紹文早期土器觀察表 (36) (6群土器- 4)



第293図 細文早期土器実測図 (79) (6. 131群土器/桐木調査区出土)

第79表 繪文早期土器觀察表 (37) (6群土器-5)

第80表 繩文早期土器総察表 (38) (6群土器-6)

学年	組合	記号	種類	地上部(下)の形態		根土	調査(P)	調査(R)	参考
				葉	花				
2年	533	6. 13	▲913(J-4)	角、葉、球状 ▲913(J-4) ▲913(J-4) ▲913(J-4) ▲913(J-4) ▲913(J-4) ▲913(J-4) ▲913(J-4) ▲913(J-4) ▲913(J-4)	角、葉、球状 角、葉、球状 角、葉、球状 角、葉、球状 角、葉、球状 角、葉、球状 角、葉、球状 角、葉、球状 角、葉、球状 角、葉、球状	根	ハケナードナナ ナナ	-	-
2年	534	6. 13	▲10475(5-1)	角、葉、球状 ▲10475(5-1)	角、葉、球状 角、葉、球状	根	ナナナナナ ナナ	-	-
2年	535	6. 13	▲913(J-4)	角、葉、球状 ▲913(J-4) ▲913(J-4)	角、葉、球状 角、葉、球状	根	ハケナードナナ ナナ	直立H、葉葉化 直立H、葉葉化	直立H、葉葉化
2年	536	6. 13	○-B(-)	角、葉、球状 ○-B(-)	角、葉、球状 角、葉、球状	根	ハケナードナナ ナナ	直立H、葉葉化	直立H、葉葉化
2年	537	6. 13	▲913(J-4)	角、葉、球状 ▲913(J-4) ▲913(J-4) ▲913(J-4) ▲913(J-4) ▲913(J-4) ▲913(J-4) ▲913(J-4) ▲913(J-4) ▲913(J-4)	角、葉、球状 角、葉、球状 角、葉、球状 角、葉、球状 角、葉、球状 角、葉、球状 角、葉、球状 角、葉、球状 角、葉、球状 角、葉、球状	根	ハケナードナナ ナナ ハケナードナナ ナナ ハケナードナナ ナナ ハケナードナナ ナナ ハケナードナナ ナナ ハケナードナナ ナナ ハケナードナナ ナナ ハケナードナナ ナナ ハケナードナナ ナナ	直立H、葉葉化 直立H、葉葉化 直立H、葉葉化 直立H、葉葉化 直立H、葉葉化 直立H、葉葉化 直立H、葉葉化 直立H、葉葉化 直立H、葉葉化 直立H、葉葉化	直立H、葉葉化 直立H、葉葉化 直立H、葉葉化 直立H、葉葉化 直立H、葉葉化 直立H、葉葉化 直立H、葉葉化 直立H、葉葉化 直立H、葉葉化 直立H、葉葉化
2年	538	6. 12	▲10294(4-4)	角、葉、球状 ▲10294(4-4)	角、葉、球状 角、葉、球状	根	ナナナナナ ナナ	-	直立H、葉葉化
2年	539	6. 12	▲10270(4-5)	角、葉、球状 ▲10270(4-5)	角、葉、球状 角、葉、球状	根	ハニコナナ ナナ	-	直立H、葉葉化
2年	540	6. 12	▲10288(4-4)	角、葉、球状 ▲10288(4-4)	角、葉、球状 角、葉、球状	根	ナナナナナ ナナ	-	直立H、葉葉化
2年	541	6. 12	▲914(J-5)	角、葉、球状 ▲914(J-5)	角、葉、球状 角、葉、球状	根	ナナナナナ ナナ	-	直立H、葉葉化 直立H、葉葉化
2年	542	6. 12	▲1075(5-1)	角、葉、球状 ▲1075(5-1)	角、葉、球状 角、葉、球状	根	ハニコナナ ナナ	-	直立H、葉葉化
2年	543	6. 12	▲10149(5-1)	角、葉、球状 ▲10149(5-1)	角、葉、球状 角、葉、球状	根	ナナナナナ ナナ	-	直立H、葉葉化
2年	544	6. 12	▲10149(5-1)	角、葉、球状 ▲10149(5-1)	角、葉、球状 角、葉、球状	根	ハニコナナ ナナ	-	直立H、葉葉化
2年	545	6. 12	▲10241(4-4)	角、葉、球状 ▲10241(4-4)	角、葉、球状 角、葉、球状	根	ナナナナナ ナナ	-	直立H、葉葉化
2年	546	6. 12	▲10241(4-4)	角、葉、球状 ▲10241(4-4)	角、葉、球状 角、葉、球状	根	ナナナナナ ナナ	-	直立H、葉葉化
2年	547	6. 12	▲905(4-4)	角、葉、球状 ▲905(4-4)	角、葉、球状 角、葉、球状	根	ハニコナナ ナナ	-	直立H、葉葉化
2年	548	6. 12	▲10151(5-1)	角、葉、球状 ▲10151(5-1)	角、葉、球状 角、葉、球状	根	ハニコナナ ナナ	-	直立H、葉葉化
2年	549	6. 12	▲10151(5-1)	角、葉、球状 ▲10151(5-1)	角、葉、球状 角、葉、球状	根	ハニコナナ ナナ	-	直立H、葉葉化
2年	550	6. 12	▲948(5-1)	角、葉、球状 ▲948(5-1)	角、葉、球状 角、葉、球状	根	ハニコナナ ナナ	-	直立H、葉葉化